

子どもたちに 聞かせたい創作童話 第42集

鹿 児 島 市
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 編
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

刊行のことば

鹿児島市と鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団では、「子どもたちの夢はぐくみ、美しい心を育てたい」という願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集してまいりました。

四十二回目を迎えた今回は、県内はもとより国内三十八の都道府県から、第一部、第二部合わせて二百五点もの応募がありました。また、年齢で見ますと、十代から九十代の方まで幅広い年齢層から、作品をお寄せいただきました。

「子どもたちに聞かせたい創作童話 第42集」では、ご応募いただいた作品の中から、特選、入選に選ばれた七作品をご紹介します。身近な日常を描いたものからファンタジーなものを取り扱った作品は、どれも子どもたちの夢はぐくみたいという思いの込められたものになっております。

この作品集が、保育園や幼稚園、小学校等の教育現場のほか、図書館や公民館等のコミュニティにおいて、本の読み聞かせ等の読書推進活動に活用されますことを期待します。

また、市民の皆様が文芸活動の一環としてこの創作童話集を活用され、今後、未来を担う子どもたちの豊かな感性や優しい心をはぐくむ優れた作品を発表されますことを願っております。

終わりに、全国各地から応募していただいた方々をはじめ、作品を審査してくださいました五名の先生方、さし絵を描いていただいた二名の先生方、そして、この作品集の刊行にあたってご尽力いただきました関係者の方々に心より感謝申し上げます。

令和三年二月

鹿児島市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

目次

	刊行のことば……………	1
第一部	特選 「おしやれな百地蔵」……………	阿部 忠彦……………5
第一部	入選 「びっくりさせちやうぞ」……………	向 風 歩……………17
第一部	入選 「ニッツとヤールのはたけしごと」……………	鵜 沼 更紗……………30
第一部	入選 「やまとくんのたからもの」……………	弓 場 貴子……………43
第二部	特選 「冬將軍日記」……………	関 根 裕 治……………59

第二部	入選	「生まれ変わって何になる？」	結城 博	79
第二部	入選	「思いをつなぐ しあわせプリン」	みやぞの せいこ	100
総評				116
入賞作品の選評				119
「第42回	子どもたちに聞かせたい創作童話」	募集要項		124
応募状況				125

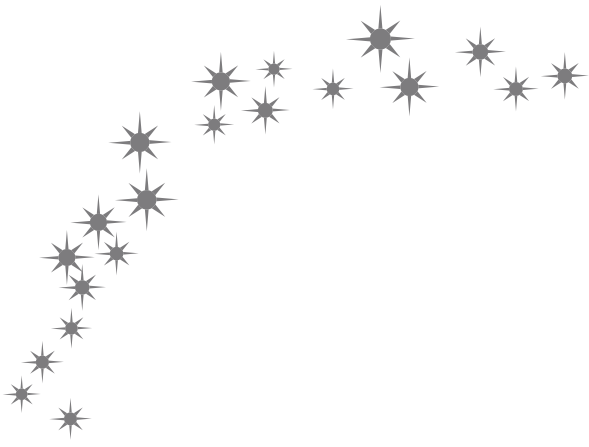
「第42回 子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品

〈第一部〉 保育園児、幼稚園児、小学校低学年を対象にした作品

特選	おしゃれな百地蔵	阿部忠彦	兵庫県
入選	びっくりさせちゃうぞ	向風歩	広島県
入選	ニッツとヤールのはたけしごと	鵜沼更紗	東京都
入選	やまとくんのたからもの	弓場貴子	鹿児島県
佳作	トゲねずみハリー	鳥塚嘉紀	群馬県
佳作	ヤマネのひまわり	山本博幸	長崎県
佳作	みっちゃんのおさんぽ	鶴田貴子	兵庫県
佳作	おひさまの仕立て屋とてるてるぼうず	末永志穂	山口県

〈第二部〉 小学校中・高学年を対象にした作品

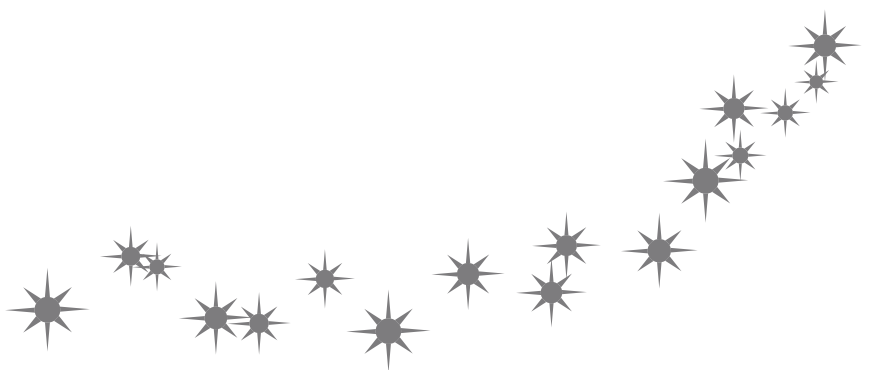
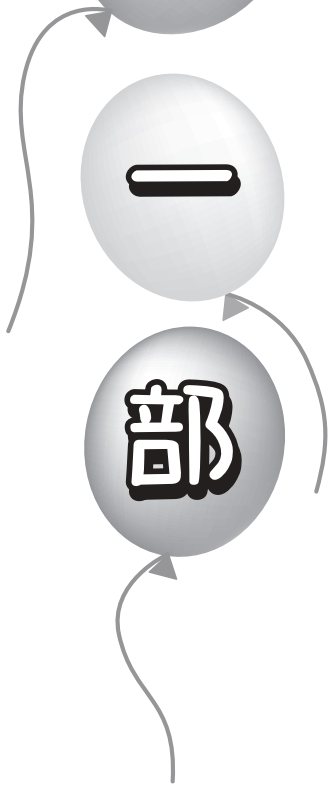
特選	冬将軍日記	関根裕治	埼玉県
入選	生まれ変わって何になる？	結城博	広島県
入選	思いをつなぐ しあわせプリン	みやぞのせいこ	鹿児島県
佳作	思いやりがさ	こんどうみえこ	東京都
佳作	母子桜	樋口達也	福岡県



第

一

部



おしやれな百地蔵ひやくじぞう

阿部 忠彦

ある村むらのはずれに、百体ひやくたいのお地蔵様じぞうさまがたてに十体じゅうたい、横よこに十体じゅうたい、きれいに並ならんで立たっておりました。誰だれが据すえたものか、今いまとなっては分わかりませんが、村むらの人達ひとたちは「百地蔵様ひやくじぞうさま」と呼よんで大切たいせつにし、朝あさな夕ゆうなに拜おがんでおりました。

八兵衛はちべえの家いえは、代々だいいだいこの「百地蔵ひやくじぞう」のお世話せわをする役やくをしておりました。野良仕事のらしごとに出でかける前まえと夕ゆう方がた、お参まいりをし、お地蔵様じぞうさまが荒あらされていなか確たしかめるのです。

例たとえば、鳥とりのふんなどがお地蔵様じぞうさまの頭あたまに落おとされていると、きれいにふきましたし、お供そなえ物が散ちらかっていたら片付かたづけ、赤あかい前垂まえだれが破やぶけておったら繕つくろったりもして、それは大事だいじに世話せわをしておりました。

秋あきのある日ひのことでした。

「ひふみよいつむうななやここのつとお。ひふみよいつむうななやここのつとお。とおかけとおでひやあくう、と」

八兵衛はお題目を唱えるように、お地藏様が百体あることを確かめ手を合わせました。「今日もみなみな様、元気で働かせてもらいました。ありがとうございます」

それを、こっそり木の陰で聞いていたのは、「百地藏様」の裏山に住む子狸です。

「八兵衛さんは『ひふみ…』って言ってるけど、なんて言ってるの？」

子狸は、穴に帰って母さん狸に聞きました。

「ああ、あれは八兵衛さんが数を算用しているのよ。『百地藏様』は全部で百のお地藏様が集まってなされる。たてに十体、横に十体きれいに並んでおるから、百体になるんだよ」

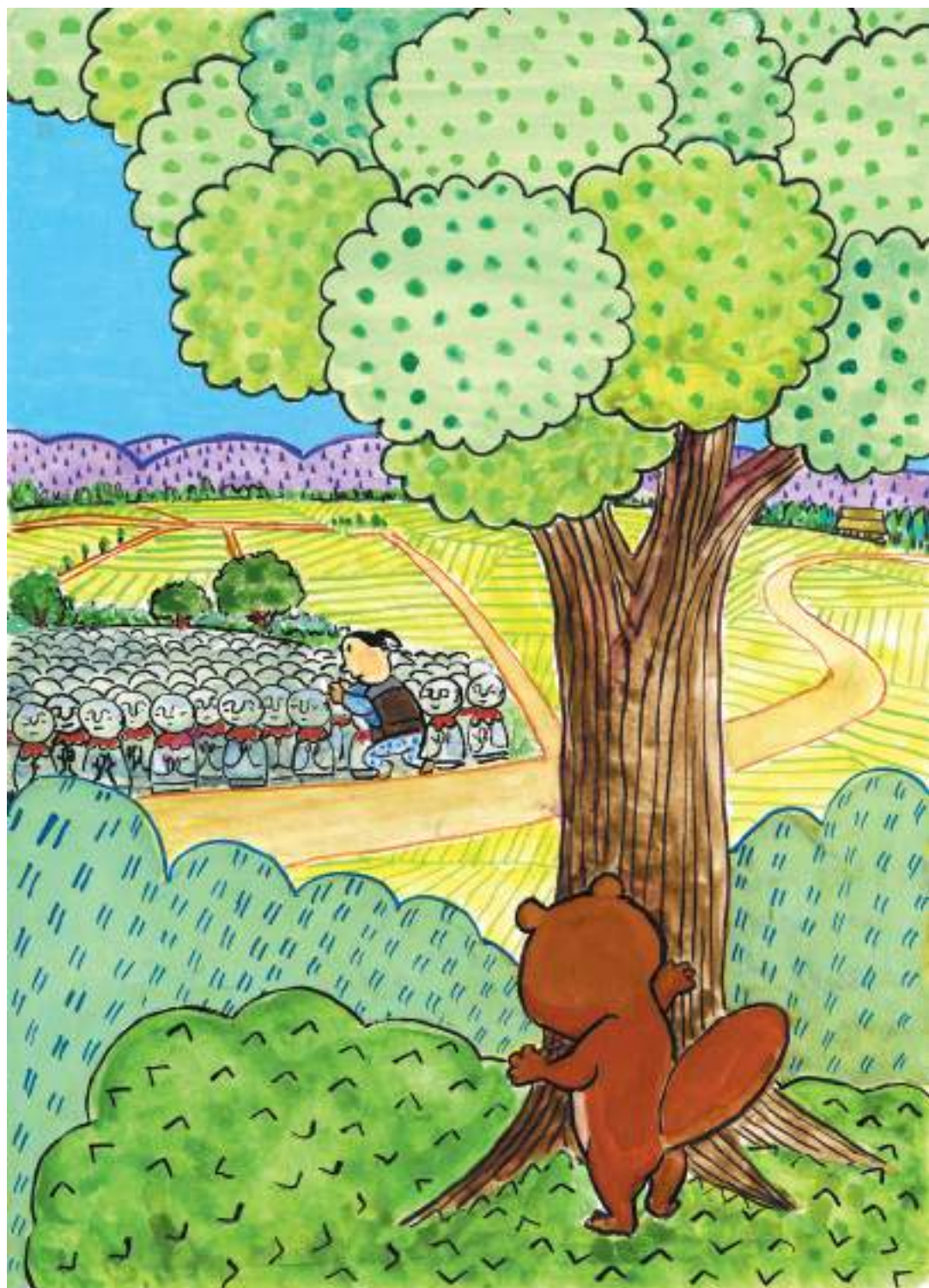
「ふうん。そうなのか。でも、怪しいものだな。お母さん、ぼく、本当に百あるか数えてみるよ」

「いいわよ。でも、坊や。おまえはいくつまで算用が出来るのだい」

「とおまで数えられるよ」

「じゃあ、どうすれば百になるのか分かるのかい」

坊やは、どうすれば百になるのか分かりません。そこで、お母さんに教えてもらいました。



「いいかい。とおを十回数えたら百になるよ」

「そうか。分かったよ」

「でも、朝になるまでに帰ってくるんだよ。八兵衛に見つかり、こっぴどく叩かれてしまふからね」

子狸は一人で「百地藏様」に出かけました。月の明るい夜なので、一人でも恐くありませんでした。

子狸は、一番後ろの列のお地藏様から、ひとつひとつ数えていきました。

「ひふうみいよ、いつぶうなな、やあここのつとお。これで十でしょう。ひいふう…」

ところが、真ん中あたりまでくると、いくつ数えたか忘れてしまふのです。

又一番後ろのはしまで帰ってやり直します。

一日目は、十を五回までしか数えられませんでした。

「母さん。お地藏様はみんな同じ頭と顔をしているから、どこまで数えたか分からなくなつてしまふよ」

子狸は母さん狸に相談しました。母さん狸は、一生懸命考えて答えを出しました。

「坊や。お地藏様の頭に目印をつけておけば、どこまで数えたか分かるんじゃないの」

「あつ、そうか。目印は何が良いかな」

「そうね。木の実をすりつぶして手にぬっておけばいいんじゃない。今なら、ヤマボウシに赤い実がなっているから、赤い印がつくわよ」

子狸は、ポンと手を打ちました。

「さすがお母さんだ。これは良いことを聞いたぞ」

その夜、子狸は、ヤマボウシの赤い実をいっぱい集め、石の上で木の棒を使ってすりつぶしました。すると、お母さんの言ったように、赤い汁がいっぴいできました。

子狸は、その汁を手につけると「百地蔵様」にやって来ました。

「ひふみよいつむななやここのつとお。よしよしこれでよし」

お地蔵様の頭には、赤い印がちゃんとついていきます。

子狸は、うれしくなっていてどんどん数えていきましたが、赤い実をすりつぶすのに時間がかかって、十を八回まで数えたときに夜が明けてきました。

「大変、大変。早く帰らなきゃ」

子狸は山の穴に走って帰りました。

「ひええ、これは何としたことか」

いつものように野良仕事に出る前に、「百地蔵様」にやって来た八兵衛は、びっくり仰天大声を上げました。

「誰じゃ誰じゃ、こんないたずらをしたのは」

八兵衛は肩に担いでいた鍬を放り投げて、腰の手ぬぐいを引き抜きました。

「お地蔵様、勘弁してください。今きれいに差し上げますから」

八兵衛は、備え付けの手桶に井戸の水を汲んで手ぬぐいをぬらすと、奥の端から順番に赤い頭をきれいにしていきました。

半刻もかかって、お地蔵様の頭が全て元通りになった頃には、すっかりお日様がのぼってしまっておりました。

「やれやれ、もうこんな時間か」

八兵衛は、鍬を担いで手ぬぐいを腰に差し直して野良仕事に出かけていきました。

翌朝、八兵衛が「百地蔵様」にやってくる時、なんとなんと同じように頭の赤いお地蔵様が八十体。

子狸は、昨日の夜も、やっぱり赤い汁を作るのに時間がかかって、十を八回までしか数

えられなかったのです。

八兵衛は、腹が立ちましたがかたがありません。今朝もせつせと赤い頭を手ぬぐいでこすって、きれいにしていきました。

翌朝、「まさか今日は無事だろう」とやってくる、なんと頭の赤いお地蔵様が九十体。八兵衛は頭から湯気を出して怒ってしまいました。

「もう三日目だ。許せん。今夜は寝ずに見張って、誰の仕業か突き止めてやる」
でも、そんなことを言っても、お地蔵様の頭はきれいになりません。八兵衛はぶつくとさ言いながらも、ひとつひとつ丁寧にきれいにしていきました。

「母さん。昨日は十を九回まで数えたんだよ。あとひと息だよ」

「そう、坊やはえらいわね。でも、毎晩毎晩出かけているのに、どうして百まで数えられないの。八十まで数えたのなら、あと二十だし、九十まで数えたのなら、あと十じゃない」
「うん。でも、夜行くと、お地蔵様の頭が全部きれいになっていくから、また木の実をすりつぶして数えるでしょう。すると、またとちゅうで夜が明けちゃうんだよ」

「坊や。数えに行くのは、少しの間やめておいた方がいいわ」

母さん狸は、「ははあん、これは『百地蔵様』を守っている八兵衛が、毎朝きれいにしているんだな」と、思いました。このまま続けていたら、夜、見張りに来るに違いない。坊やがやっていることがばれたら、きっとひどい目にあわせるだろう。どうにかして、やめさせなければ。

「坊や。きっと頭をきれいにしているのは、お地蔵様よ。赤い頭が嫌なのよ。だから、もう数えるのはやめておきましょうね」

「やだやだ。絶対やだ。ぼくはやりとげるんだよ。赤いのが嫌なら、いろいろな葉をすりつぶして緑にしたらどう？。お地蔵様は喜ばないかな。黒だったら髪の毛みたいだよ」

「分かった。赤でいいから。今晚だけよ」

母さん狸は、子狸に根負けして許してしまいました。

さてその晩のことです。八兵衛は誰が百地蔵様にいたずらをしているのか確かめてやろうと、真夜中に木の陰で待ち構えておりました。

すると、子狸が手を真っ赤にしてやってくるではありませんか。子狸の仕業だとすぐに知れましたので、とっ捕まえてやろうと思いましたが、子狸が大きな声で「ひいふうみ

「い」と数え出しましたので、しばらく様子を見ることにしました。

子狸は、お地蔵様ひとつひとつの頭に赤い印をつけて数えていきました。

「このつ、とお。これで十が五回、ひいふうみいよ…」

「子狸はかけ算を知らないから、一つずつ数えて百あるか確かめようとしているんだな」

八兵衛は、おかしくなりました。この調子では、また夜が明けてしまいそうです。だって、子狸は本当にゆっくりゆっくり数えていくのですから。

案の定、九十二まで数えたとき、夜が明けてしまいました。子狸は急いで山の奥へと消えていきました。

「さてどうすべえかのう」

今までと同じように消してしまうのは簡単ですが、子狸が熱心に数えるのを見ってしまうと、それもかわいそうです。

「村の人には、一日辛抱してもらおうべえ」

八兵衛は頭の赤いお地蔵様をそのままにして、野良仕事に出かけました。

さて、黙っていないのは、赤い頭のお地蔵様を見せられた村人達です。

「八兵衛、なまけとらんと、はようお地蔵様の頭をそうじせんか」



何人もが八兵衛の畑にやって来ては、言いつのりします。

「へえ。これが片付いたら帰りますから」

八兵衛は誰がやって来ても、そう言いわけするばかりです。

そして、やっと夜になりました。

昨晚と同じように、木のかげで待っておりますと、子狸がやって来ました。

「やつ、これはどうしたことだろう。赤い印が、まだついたままだ。昨日は確か、十を

九回とふうまで数えたから、今日は十を九回とみいからだ。簡単簡単。十を九回とみい、

十を九回とよう、十を九回といつ」

そして、とうとう「百」と数えきりました。八兵衛は、思わず拍手をしてみました。

「よく頑張ったね」

「今の声はだあれ？」

「わたしは、お地藏様だよ」

八兵衛はとっさにうそをつきました。

「お地藏様。やっと百まで数えました。でも、頭を真っ赤にして、ごめんなさい」

「いいんだよ。ちよっとおしやれをした気分だったよ」

「でも、きれいに洗あらってたじゃないか」

「ああ、あれはね。この上うへだけ雨あめが降ふったからなんだ」

「そうか。ぼくは昼間ひるまは寝ねているから分わからないんだね」

「そうだね」

「よく分わかりました。百地蔵ひやくじぞうさま様は、確たしかに百ひやくありました」

「そう。分わかって良よかったよ」

八兵衛はちべえは、子狸こだぬきが本当ほんとうにうれしそうなので、かけ算ざんなど、教おしえない方ほうがいいと思おもいました。

「では、百地蔵ひやくじぞうさま様、おやすみなさい」

子狸こだぬきは、夜よが明あける前まえに山やまに帰かえっていききました。ちよつとスキップをしながら。

「やれやれ。明日あしたは少すこし早はや起きして、朝あさから雨あめを降ふらせようかのう」

八兵衛はちべえもニコニコ笑わらいながら、村むらへ帰かえって行いきました。

びっくろくわせちやんぞ

向風 歩

こどものオバケは、ひとには、みえません。

みんな、ちいさくてまるい、ふうせんのようなすがたをしているそうです。

こどものオバケは、ひとをいっぱい「びっくり」させて、おおきくなります。

おおきくなると、ちょうどセミがだっぴするように、ふうせんのようなすがたから、おとなのオバケに、へんしんします。

すると、ようやく、にんげんに、すがたがみえるようになるのです。

こどものオバケは、それぞれ、じぶんにぴったりの「びっくり」をみつけて、おとなのオバケになります。

あるところに、うまれてまもない、こどものオバケがいました。

なまえは、「フウ」といいます。

フウのおとうさんは、おおにゆうどうで、おばけやしきではたらいています。

フウのおかあさんは、きゆうけつきで、おとものコウモリをいっぱいしたがえて、こわいえいがの、だいスターです。

「ぼくも、はやくおおきくなりたいなあ」

フウは、おもいました。

「そうだ、これから、にんげんのまちにでかけて、たくさんひとを『びっくり』させよう」
だけど、ちよっぴりしんぱいになりました。

「にんげんって、こわいかなあ」

オバケがひとをこわがっているのは、おおきくなれっこありません。

「ぼくだって、オバケだぞ。こどもだって、やればできるのさ」

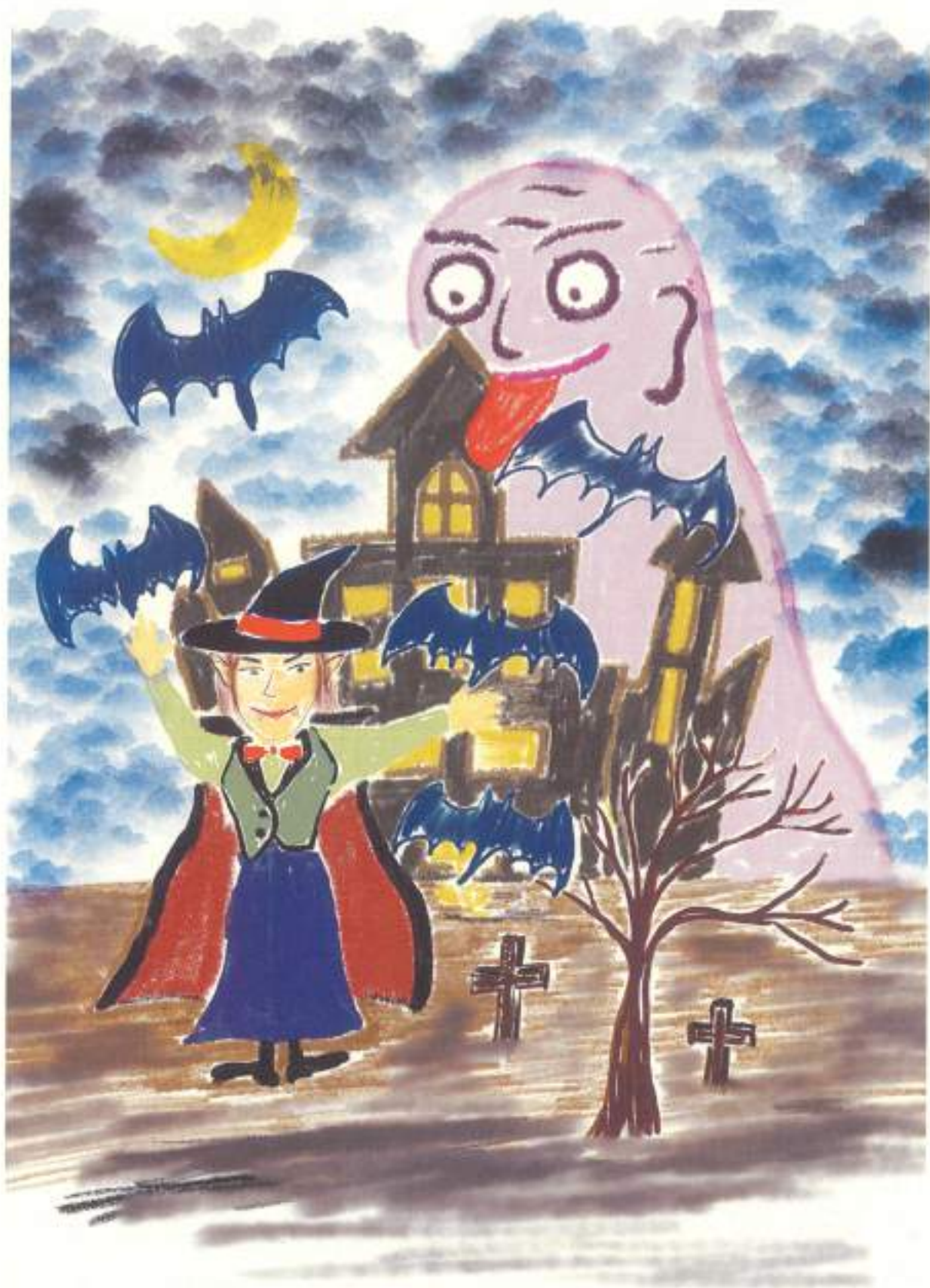
フウは、ゆうきをだして、にんげんのすむまちにでかけました。

おそらを、ふわふわとんでいくのです。

さて、にじかんくらい、たちましたか。

「わあ、おおきなおうちがいっぱいだ」

フウは、にんげんのまちにつきました。



「だれを『びっくり』させちゃおうかな」

フウは、まちのようすをみてまわりました。

もちろん、にんげんたちに、フウのすがたはみえません。

つかまらないので、あんしんです。

「くんくん、いいかおりがするぞ」

あおいやねのおうちから、あまいかおりがします。

フウは、ガラスのまどから、おうちのなかをみました。

「わあ、おいしそうなクッキーだ」

ちようと、キッチンで、おばあさんがクッキーを、焼きあげたところでした。

「そうだ、まず、あのおばあさんを『びっくり』させよう」

オバケは、おうちに、かぎがかかっているもへっちらです。

へやのかべを、「スルツ」とぐりぬけると、こっそりキッチンにしのびこみました。

テーブルにおかれた、おおきなしろいおさらには、できたてほかほかのクッキーが、た

くさんありました。

「ゴクリ」

フウは、つばをのみこみました。

そして、おばあさんを「びっくり」させるさくせんを、おもいついたのです。

「えへへ、ぼくが、このクッキーを、ぜんぶたべちゃおう」

「しらないあいだに、おさらのクッキーがなくなったら、きつと、おばあさん『びっくり』するにちがいないぞ」

フウは、おばあさんが、ほかのへやにいつているすきに、クッキーを、ひとつのこらず、たべてしまいました。

「ああ、おいしかった」

フウは、おなかがいっぱいになりました。

すると、そこへ、ようじをすませたおばあさんがもどってきました。

「まあ、どうして！」

おばあさんは、おおきなこえで「びっくり」しました。

「やった、うまくいったぞ」

フウは、ふくれたおなかをさすりながら、おもいました。

だけど、おばあさんは「びっくり」すると、すぐに、とてもこまったような、かなしそ

うなかおになりました。

「ああ、どうでしょう」

「もうすぐ、かわいいまごたちがやってくるわ。きょうは、『てづくりのおいしいクッキーをごちそうする』って、やくそくしていたのに」

「たぶん、できあがったクッキーを、あじみをするつもりで、ぜんぶたべちゃったのね。わたし、くいしんぼうだから」

「もう、あたらしいクッキーをつくるじかんもないわ。ざんねんだけど、ちかくのおみせでおかしをかってきて、あのこたちに、あやまりましょう。ゆるしてくれるといいけれど」

おばあさんは、あわてて、でかけました。

「ぼくは、おばあさんを『びっくり』させたけれど……」

「なんて、わるいことをしてしまったんだ」

フウは、こころが、とてもくるしくなりました。

このままおおきくなったら、ひとをこまらせて、かなしませる、とつてもわるいオバケになってしまいそうです。

「おばあさん、ごめんなさい」

そういいのこして、フウは、おばあさんのおうちから、でていきました。

「きっきのおばあさんみたいに、ひとをこまらせたり、かなしませてしまう『びっくり』は、もう、やめよう……」

フウは、かなしくなって、だれもいない、こうえんのベンチにすわって、なきました。こえがかすれるくらいないで、フウは、ようやくなきやみました。

だけど、ひとを、いっぱい「びっくり」させないと、フウは、おおきくなれません。

「こんどは、きをつけよう」

「さあ、つぎは、だれを『びっくり』させようかな」

フウは、あたらしいきもちで、にんげんのまちを、ふわふわとびました。しばらくとぶと、ひろいどうろにでました。

「きれいなおみせや、おそらにとどきそうな、たかいたてもものがあるぞ」
くるまが、いっぱいはいしていて、ひとが、たくさんはたらいています。

「おやっ、あそこでなにをしているのだろう」

ビルのちゅうしゃじょうにとまったトラックから、おおぜいのひとたちが、にもつをおろしています。

「そうだ、こんどは、あのひとたちを『びっくり』させよう」

こんなこともあるうかと、フウは、びっくりばこをもってきたのです。

こっそり、トラックにしのびこむと、びっくりばこを、おきました。

「あれっ、こんなはこ、あったかな？」

なにも知らないおじさんが、びっくりばこを、もちあげたときです。

「ビロロッン」

びっくりばこから、ピエロのにんぎょうや、おもちゃのカエルがとびだしました。

「ひええっ！」

おじさんは、「びっくり」して、しりもちをつきました。

「ばんざい、やったぞ」

フウは、よろこびました。

ところが、おじさんは「びっくり」すると、かおをまっかにして、おこりました。

「だれだ、こんな、いたずらしたのは」

「いますぐ、でてこい」

まるで、じごくにいるあかおにのように、とてもおそろしいかおでした。



フウは、こわくて、ブルブルふるえました。

「かくれても、むだだぞ」

おじさんにも、フウは、みえないはずです。

だけど、おじさんは、どんどんフウのそばにやってきました。

「しりもちをついて、あやうく、かいしゃのたいせつなにもつをこわすところだったぞ」

「だれもない……、にげちまったのか」

おじさんは、ようやくあきらめて、しごとにもどりました。

「ああ、こわかった」

フウは、まだふるえています。

「ぼくは、おじさんを『びっくり』させたけれど……」

フウは、とてもいやなきもちになりました。

このままおとなになったら、ひとをからかっておこらせるだけの、つまらないオバケになっちゃいます。

「おじさん、ほんとうに、ごめんなさい」

はたらいしているおじさんに、ふかぶかとあたまをさげると、フウは、とびさりました。

「おじさんが、あんなにおこったのは、いっしょうけんめい、おしごとをしていたからだ。だれでも、がんばっているときにじやまをされたら、はらをたてるのは、あたりまえだ。ああ、あんなこと、しなければよかった」

フウは、じぶんがくやしくなりました。

そして、だんだん、げんきをなくしていきました。

「きょうは、もう、かえろうかな」

ふらふらと、かわべりをとびながら、フウは、おうちがこいしくなりました。

そのときです。

「うえーん」

ちかくのおおきなはしのまんなかから、にんげんのこどものなきごえがしました。

「どうしたのだろう？」

フウは、きになって、ちかづいてみました。

「えーん、おさいふ、おとしちゃったよう」

おんなのこが、ないています。

「おこづかいをためて、やっと、おかあさんのおたんじょうびのプレゼントを、かいいい

く、とちゅうだったのにい」

かわのそこには、あかいおさいふがしずんでいました。

「ああ、あのおさいふか」

フウは、おんなのこが、かわいいそうになりました。

「そうだ、ぼくなら、たすけてあげられるぞ」

フウは、「ザブン」と、かわにとびこむと、おさいふをひろって、おんなのこのあしもとに、そっとおきました。

「ええっ！」

おんなのこは「びっくり」しました。

だって、こどものオバケは、にんげんにはみえません。

おんなのこには、おとしたおさいふが、いきなりかわのそこからとびだして、ひとりだけに、じぶんのところに、もどってきたようにみえたのですから。

「うれしい」

「きつと、てんしさんがたすけてくれたのに、ちがいないわ」

「やさしいてんしさん、ありがとう」

おんなのこは、おれいをいうと、すぐにえがおになって、げんきよくかけだしました。きつと、おかあさんのプレゼントを、はやくかいいにきたかったのでしょうか。

「ぼくは、てんしじゃないよ。オバケだよ」

フウは、くちをとがらせました。

だけど、フウも、にっこりえがおになりました。

「みんなが、えがおになる『びっくり』って、すごく、いいな」

なんだか、こころがあったかくなって、げんきがわいてきます。

「おたんじょうびに、とっぜんプレゼントをわたされて、あのこのおかあさんも、『びっくり』するのかな」

フウは、きめました。

「ぼくは、みんなが、えがおで、しあわせになる『びっくり』を、いっぱいみつけるぞ！」

フウは、すっかりげんきになって、おうちにかえていききました。

フウが、おとなのオバケになって、みなさんにもみえるようになったら、いったいどんなすがたになって、あらわれるのでしょうかね。

ちよっぴり、たのしみです。

ニッツとヤールのはたけじゅうと

鵠沼 更紗

むかしむかし、あるむらにニッツとヤールというふたごのきょうだいがありました。

あるひ、ふたりのおとうさんとおかあさんがいいました。

「わたしたちは、もうこのさきながくはいきられないだろう。これからは、ふたりでなかよくはたけをたがやして、やさいをそだてなさい。そして、そのやさいをうってくらしていくのです。」

それからしばらくして、おとうさんとおかあさんはこのよをさりました。

ニッツとヤールはしばらくおりました。このままではじぶんたちもおなかがすいてしんでしまうとおもいました。

ふたりはおとうさんとおかあさんにいわれたとおりにはたけをたがやすことにしました。

ニッツはいいました。

「ぼくは、どうぶつたちがはたけをあらさないようにここでみはっているから、ヤールがはたけをたがやしてくれよ。」

ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。それでは、ニッツはみはりをたのんだよ。ぼくはくわではたけをたがやして、やさいのたねをうえるとしよう。」

ヤールはいっしょうけんめいあせをながしてはたけをたがやしました。たねをひとつぶひとつぶていねいにうえては、うえからつちをかぶせてみずをやりました。

いっぽうニッツは、はたけのすみにあるこかげですやすやねむっていました。

しばらくして、はたけはみどりのはっぱでいっぱいになりました。

おいしいはっぱをねらって、むしたちがたくさんとんできます。

ニッツはいいました。

「ぼくはこれいじょうむしがやってこないように、ここでみはっているから、ヤールははたけのむしをおいはらってくれよ。」

ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。ニッツはむしがやってこないようにみはっていてくれよ。ぼ

くははたけのなかにいるむしをおいはらうから。」

ヤールはあせだくでむしをおいはらいました。

いっぽうニッツは、はたけのすみにあるこかげですやすやねむっていました。

しばらくして、はたけのなかにはやさいがたくさんみられました。にんじん、じゃがいも、たまねぎ、それからこむぎもなりました。

ニッツはいいました。

「ぼくはここでやさいどろぼうがこないようにみはっているから、ヤールはやさいをしゅうかくしてくれよ。」

ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。ぼくはやさいをしゅうかくするから、ニッツはやさいがどろぼうにぬすまれないようにみはっていてくれよ。」

ヤールはふうふうといきをはいて、かおをまっかにしてやさいをリヤカーにのせました。

いっぽうニッツは、はたけのすみにあるこかげですやすやねむっていました。

リヤカーはやさいでいっばいになりました。ふたりは、おとうさんとおかあさんにいわれたとおり、やさいをうるためにいちばへいくことにしました。



ニッツはいいました。

「ぼくはうしろでやさいがおちないようにみはっているからヤールはリヤカーをひいてくれよ。」

ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。ぼくがリヤカーをひくから、ニッツはやさいがおちないようにうしろからみはっていてくれよ。」

ヤールはずっしりとおもいリヤカーをちからいっぱいひきました。

ニッツはくちぶえをふきながらリヤカーのうしろをついてあるいていきました。

いちばでは、ふたりのやさいはとぶようにうれしました。そうして、たくさんのおかねをもうけたので、ミルクとたまごをかってかえりました。

うちにかえると、ふたりはとてもまんぞくしたきもちでした。

つぎのひ、ヤールははたけでとれたこむぎをひいてこなにしました。そのこなとミルクとたまごでパンをつくりました。

「これはおいしいね」

ニッツとヤールはかおをみあわせました。

ニッツはいいました。

「このパンをいちばでうったらどうだろう」ヤールはいいました。

「それはよいかんがえだね。」

つぎのひふたりは、パンとやさいをつんでいちばへいきました。

そこへ、となりむらのおうさまのつかいのものがかにきました。

「おうさまがめしあがるので、いちばでいちばんおいしいやさいとパンをもらおう。」

ヤールは、まるくっておおきなパンと、ピカピカにみがいたやさいをさしました。

つかいのものはたくさんのかんかをおいていきました。

ふたりはうちにかえって、もらったきんかをながめておよろこびをしました。

ニッツはいいました。

「これからもやさいとパンをうれば、ぼくたちはおおがねもちになれるだろうね。」

ヤールはいいました。

「そうだね。これからはたけしごととパンづくりをがんばろう。」



コンコンコン。

あくるひのあさはやく、ふたりはドアをたたくおとでめがさめました。

ヤールが、めをこすりながらドアをあけると、となりむらのおうさまと、つかいのものがたっていました。ニッツもおどろいてベッドからおきあがりました。

おうさまはいいました。

「おまえたちのつくったやさいとパンをたべて、あまりのうまさにわたしのからだはたいそうよろこんでいる。そこで、おまえたちのどちらかにわたしのしろにきてもらいたい。そして、しろのとなりにはたけをつくり、やさいとパンをつくってほしいのだ。ほうびはもちろんやろう。」

そうきくやいなや、ニッツはベッドからいそいでヤールのとなりへやってきていいました。

「おうさま、わたくしニッツがしろへおともします。」

それをきいたヤールがいました。

「ニッツがいなければだれがはたけのみはりをするというのだ。やさいをどうぶつやむしにくわれそうになったらどうする？ やさいどろぼうがきたらどうしたらよい？ リヤカーからやさいがおちたらきづくひとがないじゃないか。」

するとニッツはいいました。

「そんなことはしんぱいごむよう。ヤールならひとりでだいじょうぶさ。はなれていてもぼくたちはふたごのきょうだいだ。ぼくはおうさまとしろへいくから、ヤールはここにのこっていままでおりやさいをそだててパンをつくっていればよいのさ。」

ヤールはいいました。

「わかったよ。さみしいけれど、ぼくはひとりでやってみせるよ。ニッツ、かならずかえってきておくれ。それまでぼくはひとりでがんばるよ。」

ふたりはだきあってわかれをおしました。

ニッツがしろへいってしまっただけでも、ヤールはひとりではたけしごとをしました。

やさいをうったおかねでミルクとたまごをかい、こむぎをひいたこなとまぜてやいてパンをつくりました。

そうしているうちにおかねがたくさんたまりました。

ヤールはいつかニッツがかえってきたときのために、たまったおかねはつかわずにとっておくことにしました。

いっぽう、おうさまとしろへいったニッツはたいへんなおもいをしていました。

はたけをたがやそうにも、たがやかたがわかりません。ヤールがやっていたように、くわでつちをたがやそうとしましたが、くわがおもくてうまくいきません。

それでも、なんとかたねをまいてみずをやりました。すると、どこからともなくりすがやってきて、うえたばかりのたねをほじってたべているではありませんか。

「あっちへいけ。しっしっ。」

ニッツがそういっておいはらってもりすはうごきません。

それからなにちかしてめがでてきました。

「ぼくだってやればできるのさ。」

とニッツはほこらしいきもちになりました。

めがのびて、はたけはみどりのはっぱでおおわれました。

すると、どこからともなくむしたちがやってきて、ニッツのそだてたやさいのはをおいしそうにたべているではありませんか。それからヤギもやってきました。ニッツはほうきをふりまわしておいはらおうとしましたがうまくいきません。やさいのはっぱはたべられませんでした。まだはんぶんぐらいのこっています。

「はんぶんのこっていれればいいでしょうぶだろう。ぼくだってやればできるのさ。」

そういつてニッツはわらいました。

ときがたち、いよいよしゅうかくのときです。

ニッツは、つちのなかのやさいをほりおこしました。にんじん、じゃがいも、たまねぎは、ヤールがそだてたものとはくらべものにならないほどちいさく、たくさんのあながあいていました。

それでもニッツはいいました。

「みためはわるいけれど、きつとおいしいはずだ。きつてりょうりにいれてしまえば、おきさなんてかんけいないさ。」

そうして、しゅうかくしたやさいをおうさまのつかいのものにわたしました。

そのひのよる、おうさまがかんかんにおこってはたけのよこにあるニッツがねとまりをしているこやへやってきました。

「わたしがもとめていたやさいとぜんぜんちがうではないか。こんなにまずいものではないか。ニッツはなくてあやまりました。」

ニッツはないてあやまりました。

「おうさまもうしわけありません。どうかゆるしてください。」

おうさまはいいました。

「しかたがない。ゆるしてやろう。あすは、パンをやくのだ。ミルクとたまごはつかいのものにもたせるから、こむぎをひいたこなをつかってパンをやくのだ。」

ニッツはいいました。

「はい、わかりました。パンはきつとうまくやきます。」

つぎのひ、ニッツははたけのこむぎをひいてこなにしました。そうして、つかいのものがもってきたミルクとたまごを混ぜてパンをつくりました。けれども、ヤールがつくって来たようにふっくらとやけません。

ニッツがやいたパンをたべたおうさまは、さらにおこってニッツをおいだしてしまいました。

ニッツはなきながらうちにかえりました。

するとヤールはたいそうよろこんでニッツをむかえました。

「ニッツ、おうさまはやさいとパンをよろこんでたべてくれたかい？」

ニッツはなきながらいいました。

「いままで、はたけしごとをてつだわなくてごめんよ。ぼくはみはりをするといいおき

ながら、ほんとうはなにもしていなかったのだ。だから、しろでもやさいもパンもおいしくつくることができずにおいだされたのだよ。これからはまじめにはたらくからどうかゆるしておくれ。」

ヤールはいいました。

「なにをいうのだ。ぼくとニッツはふたりではたけしごとをがんばってきたじゃないか。またいっしょにはたけしごとをがんばろう。」

つぎのひから、ニッツはヤールのまねをしながらあせをかいていっしょうけんめいはたけしごとをしました。そして、パンをつくるときもヤールにおそわりながら、パンをこねました。

ふたりはいちばへ行ってやさいとパンをうり、いつまでもなかよくくらしきましたとさ。

やまどくんのたからもの

弓場 貴子

はがぬけた！

やまどくんはうれしくって、わあい、わあい、とスキップをしました。

ぐらぐらして、ずっと気きになっていたんです。じゆぎちゅうよう中も、ごはんをたべるときも、ねるときも。一年生いちねんせいになってやっと、はじめてぬけたはです。

「やまと、やっとぬけたのか」

いっしょに下校げこうしていたようちゃんが、のぞきこんできました。

「うん、ほら見て」

「じゃあ、こんやはまくらもとにおいてねるの、わすれるなよ」

「なんのこと？」

「知らないのか。ぬけたはをはこに入れて、まくらもとにおいてねると、ねずみがたから

ものところかんしてくれるんだぞ」

ようちゃんは、とくいそうにいいました。

「ただいま。おかあさん、はがぬけたよ！」

おうちにかえると、やまどくんはぬけたはをおかあさんに見せました。

「まあ、よかったわね。おめでどう」

手にのせた小さなはを見て、おかあさんはニコニコしながらいいました。

「そうだわ、あしたはおかあさんのたんじょう日だから、そのはをきねんにほしいなあ」

「だ、だめだよ。ねずみさんが、たからものところかんしてくれるんだって、ようちゃんが
がおしえてくれたんだ」

「まあ、そうなの？」

やまどくんは、ようちゃんからきいたはなしをおかあさんにおしえました。

「それで、ようちゃんはなにのところかんしてもらったの？」

「えっとね、百円玉ひゃくえんだまだって」

やまどくんがそういうと、おかあさんはわらっていいました。

「それはすごいわね。じゃあ、やまとも百円玉ひやくえんだまにこうかんしてもらうのかな」

「ううん、ぼくは……」

やまとくんは、ちらりとおもちやばこのほうを見みました。じつは、ようちゃんのはなしをきいたときから、やまとくんにはかんがえていることがあるのです。

「あつ、いけない。おなべ、おなべ」

おかあさんが、あわててだいでころのほうへ行いきました。

やまとくんはおもちやばこからかみねん土どのケースをとり出だすと、その中なかに入はいっているかたまりを見みながら、よし、ときめました。やっぱり、この中なかに入いれるしかありません。

かみねん土どをわきによせて、ティッシュをひいて、だいじにはをのせます。だいでころから、おかあさんがききました。

「やまとはなににどうかんしてもらうの？」

「ないしょ！」

やまとくんはおかあさんに見みられないように、白しろいかみになにかをかきました。そしてそれをはこに入いれ、ふたをしめました。

これで、じゅんびばんたん。

はたして、ねずみさんはやってくるのでしょうか。

そのよること。

やまどくんは、ふと、目がさめました。どこかで小さなはなしごえがします。

「あったあった、このはこじやな」

「ようやくわしのばんがきたぞ。しっかりあうといいがのう」

そうっと目をあけると、まくらもとに、なにやら小さなかげがふたつ。ちようどやまどくんのはこをあけて、中^{なか}みをかくにんしているようです。

「なんじゃ、このかみは」

「それより、はをさがせ。ああ、あった」

「なにかかいてあるようだが、よめんのう」

それをきいて、おもわずやまどくんはこえを上げました。

「ええっ、よめないなんてこまるよ！」

すると、

「うひゃあー！」

二つ^{ふた}のかけは、びっくりしてとび^あ上がりました。そしておどろいたひょうしに、もっていたはを^おぼーんとほうりなげてしまいました。

「ああっ」

たかくとんだやまどくんのはは、きれいなカーブをえがくと、そのままなりにねていたおとうさんの^お大きくあいた^{くち}口めがけて、おちていきました。あわててとろうとしましたが、まにあいません。

すぽっ。

「ふがふが、むう、ううむ、ごっくん」

なんとおとうさんは、いびきといっしょにやまどくんのはをのみこんでしまったのです。

「ええ、そんなあ」

やまどくんは、がっかりしました。ぼくのだいじなは、たからものところかんしてもらはずだったのに。やまどくんの^め目に、みるみるなみだがうかびました。

ところが、やまどくんがな^だき出すそのまえに、すぐとなりでこえがきこえてきました。

「ああ、こんなひどいことってあるもんか」

ちやいろとはいいろの二^にひきは、な^なきながいいました。ふさふさした^け毛、ながくのび

たほそいしっぽ。ニひきは、やまとくんがおもっていたよりもふたまわりくらい大きく、二本足で立っていました。ですが、どこからどう見てもねずみのすがたをしています。

「チュウ先生におこられるなあ」

「わしのは、わしのはが……」

ニひきがあんまりがっかりしているので、やまとくんはかわいそうになってきました。

「あの、ごめんね」

すると、本だなのかげから、べつのがこえがしました。

「気にすることはありませんよ。やまとくんをおこしてしまったかれらがわるいのです」

「チュウ先生！」

あらわれたのは、まっくろのねずみでした。ニひきとちがうのは、ガラス玉のような目に、きらりとひかるメガネをかけているところですよ。

「こんばんは、やまとくん。わしはチュウ。ねずみのはいしやです」

「はいしやさん？」

「そうです。なにしろねずみは、はがいのちなのでねえ」

チュウ先生はそういうと、ニひきのねずみにちかづきました。

「さあ、過ぎてしまったことはしかたありません。つぎのきかいをまちましよう」
ちやいろのねずみは、のろのろと立ち上がりました。がっくりとかたをおとしたはいいろのねずみは、まだうつむいたままです。

やまとくんは、チュウ先生のほうをむいてたずねました。

「ねずみさん、いったいどうしたの？」

「かれはひと月まえ、はがかけてしまったんです。わたたちは、はがおれたり、かけたりにしてしまうと、なにもたべることができません。だからにんげんのぬけたはをちようだいして、あたらしいはをつくるんですよ。そのはをつくるのが、わしのしごとです」

チュウ先生はニツ、と口をひらいて、するどいはを見せてくれました。

「ただし、どんなはでもいい、というわけではなくてね。けんこうでじょうぶで、そしてぴったりあう大きさのはをさがすのに、みんなじゅんばんまちをしているんです」

ぽんぽん、とチュウ先生がかたをたたくと、はいいろのねずみはようやく、ゆっくりと立ち上がりました。

わしのばんがきたぞ、といっていたのは、そういうわけだったんだ。やまとくんは、おちこんでいるねずみがとってもかわいそうになりました。

「あ、そうだ！」

やまとくんは、いいことをおもいつきました。がさごそ、とまくらもとのほこをとり出すと、ゆびのさきでほんのひとつまみ、白いかみねん土しろを小さくまるめていきます。

「ちよっと、まってね」

「いったいどうしたんです？」

ねずみたちが、やまとくんのまわりにあつまりました。やまとくんはこねたかみねん土どを、こんどはぎゅっぎゅっとかためました。小さく、かたく、じょうぶに。

「ほら、見て！」

やまとくんが手のひらにのせて見せたのは、白いかみねん土どのかたまり。でも、ぬけたやまとくんのはにそっくりです。

「これはすごい。りっぱなはだ！」

ねずみたちは、そろってやまとくんのおおを見上げました。まっくろでキラキラひかる目に見つめられて、やまとくんはへっとわらいました。

「いまはまだやわらかいけど、かわいたらカチカチになるんだよ。これなら、はのかわりになるんじゃない？」

「それでは、ちょっとしつれいして」

チュウ先生はかみねん土のはをとると、はいいろのねずみの口へもっていきました。あーん、とあけた口と、なんども見くらべています。そしていいました。

「うん、まだやわらかいうちにかたちをととのえて、やってみるかちはありそうですね。りっぱなはができるかもしれません」

「やったあー！」

はいいろのねずみは、とび上がってよろこびました。おなじくらいよろこんでいるちやいろのねずみと、手をとりあって、二ひきはダンスをおどりはじめました。やまどくんもうれしくなって、いっしょにおどりました。チュウ先生も、かみねん土のはをだいじそうにかかえて、にこにこわらっています。

「ありがとう、ほんとうにありがとう。こころからおれいというよ。さあ、たからものところかんじゃ。なにがよいかね？」

はいいろのねずみがいいました。

たからもの。やまどくんは、ごくりとつばをのみました。そして、かみねん土のはこちら、一まいのかみをとり出しました。



「あ、しゃっきの」

ちやいろのねずみがいいました。

「それと、これ……」

やまとくんは、はこからもう一つ、手のひらほどのかたまりをつまみ上げると、ねずみたちのまえにおきました。くしゃりとにぎりつぶしたようなかたまりに、ほそいぼうみたいなものがついています。

チュウ先生せんせいが、やまとくんからうけとったかみをよみ上げました。

『お花はなと、こうかんしてください』

ねずみたちは、かみねん土どのかたまりと、やまとくんのかおを、かわるがわる見みつめました。

「これね、ぼくがつくったかみねん土どのお花はな、なんだ。あしたはおかあさんのたんじょう日びだから、がんばってつくったんだけど」

やまとくんのこえは、だんだん小さくほそくなっていきます。

「でも、うまくいなくて……だから……」

「よし、わかった！」

はいいろのねずみはひぎをポンとたたくと、大きなこえでいいました。さっきまでのおちこんでいたすがたが、うそみたいです。やまどくんは、ぽかんと目をまるくしました。「花じゃな、花。よし、こうかんせいりつ！、あしたのあさをたのしみにしておれ！」

「うが早い、ものすごいスピードでそとへかけ出してしまいました。」

「おおお、わしもこうしちゃおれん」

ちやいろのねずみも、あわててあとをおいます。ねずみは本だなの手まえでくるつとふりかえると、やまどくんのほうへぺこつとあたまを下げ、いそいでへやを出ていきました。

「おさわがせしましたね」

ぽかんとしたまま見おくれたやまどくんに、チュウ先生はこえをかけました。

「ううん、ぼくだって」

「りっぱなはを、ありがとう」

チュウ先生はれいぎただしく、ぴしりとおじぎをしました。つられるように、やまどくんもあたまを下げました。

「それでは、しつれい。あすのあさを、どうぞおたのしみに」

やまどくんがかおを上げたときには、チュウ先生のすがたはありませんでした。

あたりはしずかなくらやみにつつまれています。もしかして、ゆめだったのかな。やまどくんは目をこらしてはこの中をのぞいてみましたが、ぬけたはは、どこにも見あたりませんでした。

あさになりました。

「おかあさん、おかあさん！」

バタバタとかいだんをかけおり、やまどくんはだいどころのおかあさんのところへ走りましました。

「やまと、おはよう」

「おはよう、おかあさん！ ねえ見て！」

やまどくんは、かみねん土のはこをさし出しました。白、きいろ、ピンク、赤。なんとそこには、いろとりどりのお花がいっぱいあって、いいかおりがしています。

「まあ、きれい。どうしたの」

「あのね、ねずみさんにたからものでおねがいたんだ。ぼくのはのかわりをかみねん土でつくってね、これならちゃんとはになるからってチュウ先生がほめてくれて、それで」

やまとくんはこうふんしながら、いっしょうけんめいおかあさんにはなしました。ねずみたちのこと、おとうさんがはをのみこんでしまったこと、チュウ先生の^{せんせい}こと。じつときいていたおかあさんは、やまとくんのあたまを、ぽんぽん、となでてくれました。

「もしかして、おかあさんのために、ぬけたはをお花^{はな}とこうかんしてくれただけなの？」

「うん。おかあさんにどうしてもプレゼントしたかったから！　おかあさん、たんじょう日^びおめでどう！」

はこの中^{なか}のたくさんのお花^{はな}を、おかあさんはうれしそうに一つずつ手^てにとってみました。するとさいごに、白^{しろ}いかみねん土^どがのこりました。くしゃりとつぶしたようなかたまりと、ほそいぼう。あのかみねん土^どのお花^{はな}です。

「これは、やまとが作^{つく}ってくれたお花^{はな}？」

「う、うん……」

おかあさんはねん土^どのお花^{はな}と、やまとくんのかおを見^みつめると、にっこりとわらいました。

「きれいなお花^{はな}、とってもうれしい。中^{なか}でもおかあさん、このやまとのお花^{はな}がいちばんすきだな。ありがとう、やまと」

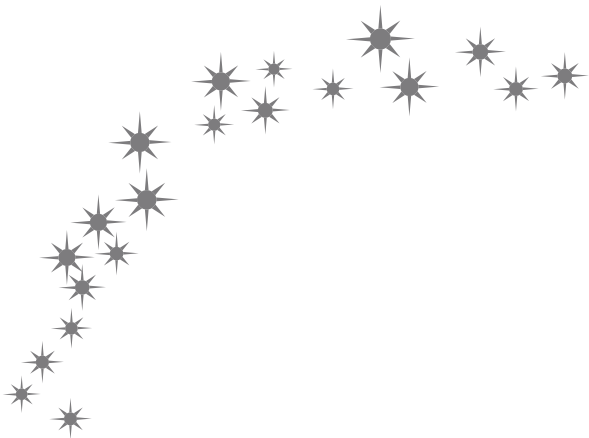
そしてぎゅうっと、やまとくんのことをだきしめてくれました。やまとくんも、おかあ



さんのことをぎゅうっとだきしめました。

「たからものを、ありがとう」

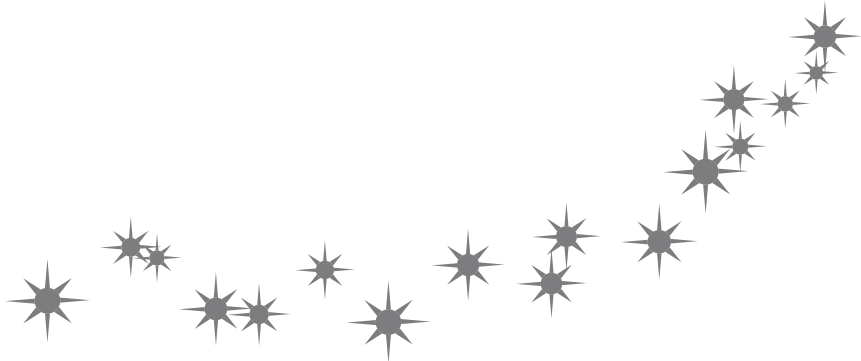
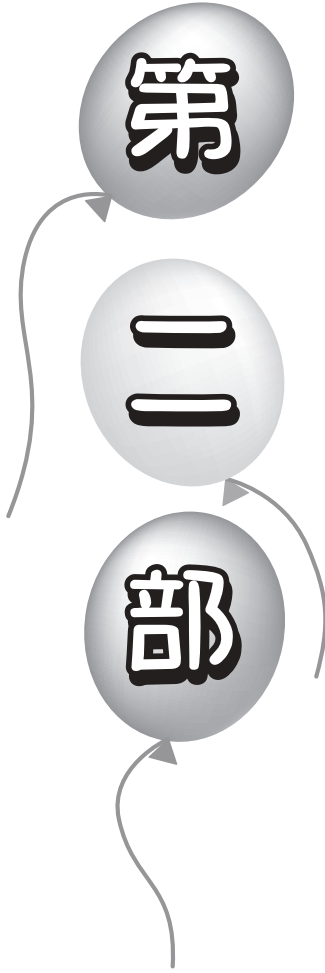
ふわりとやわらかい花はなのかおりが、ふたりをやさしくつつみました。



第

二

部



ふゆしやうぐんに つき
冬將軍日記

関根 裕治

じゆうにがつにじゆういちにち
十二月二十一日（晴れ）

きよう 今日からぼくは、日記をつけることにした。

「日記」といっても、毎日（まいにち）は書（か）けないと思う（おも）。計算（けいさん）ドリルの宿題（しゅくだい）が多い（おほ）日は、夜遅（よるおそ）くまでかかりつきりになってしま（しま）うし、すもうクラブの練習（れんしゅう）がきつい日（ひ）は、つかれて早（はや）く寝（ね）てしま（しま）うから。

それに「毎日（まいにち）書（か）かなきゃ」というプレッシャーがあると、ぼくは長（なが）続（つづ）きしないんだ。

「書（か）けるときに書（か）く」とか「変（か）わったことがあつた日（ひ）に書（か）く」くらいにしておかないと、三日坊主（みっかぼうず）で終（お）わってしま（しま）う。

日記帳（にっきちやう）は今日（きよう）近所（きんじよ）の文房具屋（ぶんぼうぐや）さんで買（か）ってきた。小学校（しょうがっこう）の友（とも）だちの中（なか）には「日記（にっき）はブロ

グに書いている」という人も多い。そういうのが流行ってるんだ。でも、ぼくは日記を人に見られるのは恥ずかしい。それに、人に読まれると思うと、かっこついたりして、正直なことが書けなくなる気がする。ぼくはなるべく起こったことや思ったことを正直に書きたい。人にナイショにしていることも書きたい。だから紙の日記に書く。しかもこの日記には鍵がついているので、勝手にだれかに読まれる心配がない。

こういうのって新しい年になってから始めるのがふつうだと思うんだけど、ちょうど冬休みに入ったので、今日から始めることにする。

とりあえず今日のところはこのへんで。

十二月二十五日（こはるびより）

今日は朝からぼかぼかしていた。冬なのに春みたいにあたたかい日を「こはるびより」と言うらしい。これは前におばあちゃんが教えてくれた。それで、日付の下にそう書いてみた。

朝から天気が良かったので、ぼくはまず洗濯物を干すために庭に出た。ぼくはおばあ

ちゃんと二人で暮らしているんだけど、洗濯物を干すのはぼくの役目なんだ。おばあちゃん、腰をのばして仕事をするのがつらかったりするの。

洗濯物を干し終えたら、庭が落ち葉だらけだったのに気づいた。よし、ついでに落ち葉も掃いておこうと思い、ほうきがしまっている納屋を開けた。

すると、ほうきの横にうずくまっている人影のようなものが見えた。

ぼくは、ビクリして納屋を飛び出した。でも、ほんとうに人がいたら困るので、もう一度おそろおそろのぞいてみた。

そこにいたのはやっぱり人だった。体育座りをして、なんだか申し訳なさそうにうつむいている。

「あのう……、どちら様？」

とたずねると、

「あ、あの……フュシヨウグンです」と答える。

「フュシヨウグン？」

「はい、冬の将軍で、冬将軍です」

「冬將軍……」

冬將軍と言えば、冬のきびしい寒さを人にたとえた表現だったはずだ。前に授業で教わったことがある。寒波がおとずれると、天気予報などで「今年も冬將軍が到来しました」なんて言い方をすると。

ところが、目の前にいる冬將軍はちゃんと人の姿をしていた。しかもヨロイを着て、カブトをかぶり、まさに將軍様のかっこうをしていたのだ。カブトの正面には大きな「冬」という字の飾りがついている。

「こんなところで何してんの？」

「まだ出番がこないの待機しているんです」

「出番って？」

「ほんかくてきに寒くなったら、わたしの出番なんです……」

「うーん。たしかに今日は冬にしてはぽかぽか陽気だけど」

「ですよ？ もっと寒くなれば堂々と『冬將軍参上！』と出て行けるのですが」

ぼくは、なんだかあべこべのような気がしてたずねた。

「冬將軍が寒くしてくれるんじゃないの？」

「いいえ、そんな力はわたしにありません。寒くなつてはじめて街に出て行けるのです。そうすれば、雪を降らすことくらいはできるのですが」

「雪を降らすことはできるんだ？」

「はい。でも、このあたたかさじゃ、とてもホワイトクリスマスなんて無理ですよ。そんなプレッシャーかけられたって……」

そうやって冬將軍はまた下を向いてしまった。

そういえば今日はクリスマスだった。たしかに雪のクリスマスになればロマンチックだろうし、街のみんなもそう望んでいるかもしれない。でも、ぼくもプレッシャーには弱いので、期待をかけられて辛い冬將軍の気持ちちがなんだか分かる気がした。

「もう少し寒くなるまでここにいさせてもらえませんか？」

と何度も冬將軍が頼むので、ぼくは気の毒になつて、

「うちに上がれば？」

とすすめてみた。しかし、冬將軍は

「いいえ、なるべく人に見られたくないので」

と言う。ぼくは、

「うーん、別にかまわないけど」

と言って、そっと納屋の戸を閉めてやった。

そんなわけで、ぼくの家いえの納屋なやには今いま、冬將軍ふゆしょうぐんがいる。おばあちゃんに話はなした方ほうがいいかどうかまだ迷まよっている。

一月一日いちがつついたち（はつひので）

今日は元旦げんたんなので、朝あさから親しんせきがたくさん来ていた。にぎやかなお正月しょうがつだった。

夕方ゆふがた、みんなが帰かえったところで、ぼくは庭にわに出てそっと納屋なやの引き戸ひきどを開あけた。さつき差し入れいしたおせち料理りょうりの残りのこは、すっかり平たいらげられていた。ぼくは、あれから毎日まいにちご飯はんやおかずの残りのこを差し入れいしていたんだ。

冬將軍ふゆしょうぐんは言いった。

「ごちそうさまでした。今日きょうのはまたかくべつに美味おいしかったです」

「そりゃ、そうさ。おばあちゃんが作つくったおせちだもん」

「おせち？」



「お正月のとくべつ料理さ。今日から新しい年だから、そのお祝いで」

「ああ、それで。ということは、もう年が明けてしまったのですね？」

「うん」

「それなのに、わたしの出番はまだ来ないみたいです」

「出番とかいいからさ、もういいかげんにこんなところから出てきて、うちに上がりなよ」

ぼくはこの一週間、ずっとそう言いつづけてきたんだけど、冬将軍はえんりよして家
上がろうとはしない。

「だって、わたし仕事してないし」

と、いじけながら爪をいじっている。

「しょうがないじゃん。学校の先生が言ってたけど、二酸化炭素だとかフロンガスだとか
の影響で、地球は冬でもあまり寒くなくなっちゃったんだって。よく分からないけど、
とにかくきみのせいじゃないよ」

ぼくは、そう言って強引に冬将軍を納屋から引きずり出した。冬将軍は申し訳なさそう
にしながらも、ようやく縁側から居間にあがってきてくれた。

こうなるともう隠しつけているわけにはいかない。いよいよ、おばあちゃんに説明し

なくちゃならない。

すると、台所の方からおばあちゃんが顔を出して、

「おや？ どちらさんだい？」
と聞く。

「えっとー、その、つまり、この人は……ぼくの友だちというか……」
と、説明に迷っていると、おばあちゃんは

「なあんだ、お友だちかい？ じゃあ、早くあがんなさいな」

と言って、冬將軍を招き入れた。そして、

「ほら、うちに上がるときはそんなコートや帽子は脱ぎなさい」

と言って、冬將軍のヨロイとカブトを脱がした。ヨロイの下は真っ白な着物で、カブトの下はちよんまげ頭だった。

夜になると、おばあちゃんは冬將軍をお雑煮でもてなしてくれた。まったく怪しんだり疑ったりしなかった。しかも、

「いくらでも泊まっていきなさい」
と居間に布団まで敷いてくれた。

おばあちゃんは、やっぱりすごいや。

いちがつなのか
一月七日（しぐれ）

始業式が終わって急いで家に帰ると、冬将軍は使われなくなった火鉢を背もたれにして、ぼくのポータブルゲームをいじっていた。

「これ難しいですね」

と冬将軍は顔をしかめているし、外は雨が降っているので、ぼくらは居間で花札をやることにした。ぼくは冬将軍に「こいこい」のルールを説明した。札に描かれた季節の絵を合わせて、得点を競う遊びなんだよと。

ところが、冬将軍は得点に関係なく、「桜」や「菖蒲」の札はすぐに捨ててしまい、「桐」や「松」の札ばかり集めている。（それは冬の札だ）しかも、カスの札ばかりを集めてしまう。

「すっきりしてる絵が好きなんですよね」
とか言ってる。

これでは、ぼくばかりが勝ってしまったって面白くない。そこで、花札はやめて将棋をさすことにした。

すると、ちよつとルールを説明したただけなのに、今度は冬將軍ばかりが勝つのだ。

「シヨウグン、すごいじゃないか！ 将棋は得意なんだね？」
と聞くと、

「うーん。なんかこれ、いくさの戦略に似てるんですよね」

と恥ずかしそうに答えた。さすがに將軍だけあって、いくさの戦略には慣れてるみたいだ。布陣の組み立て方が抜群に上手かった。「歩」も「金」も「銀」も見事に使い、ぼくの駒をけっして「王将」に近づけなかった。

「ちえつ。降参だよ、シヨウグン」

今度は、冬將軍ばかりが勝って面白くなかった。

そんな風にあれこれ試しているうち、トランプなら対等に戦えることを発見した。それで、ぼくらは「ババ抜き」に夢中になった。これならルールは簡単だし、ぼくが勝ったり、冬將軍が勝ったりでちようど良かった。冬將軍は、

「このゲームを考え出した人、天才ですね」

と言った。熱中しているうちにすっかり夜になってしまった。
おばあちゃんが、七草粥を作ってくれたので三人で食べた。

一月二十日（うららか）

庭には小さな陽だまりができていて、はやばやとフキノトウの芽が出ていた。

こんなうらかな陽気ではまだ出番が来ないようで、冬將軍は居間のテレビで古いビデオばかり観ていた。雪に埋もれる北国のようすをえがいたドラマだった。

ぼくはふと、大晦日にやり損ねた仕事を思い出した。障子紙の貼りかえだ。去年の大晦日は、家の大掃除をしたり、冬將軍に差し入れをしたりで忙しく、すっかり忘れていたのだ。

そこで、ぼくは冬將軍に障子紙の貼りかえを手伝わせることにした。

冬將軍は、手ぎわよく糊をぬり、シワにならないように丁寧に障子紙を貼った。

「シヨウグン、上手じゃないか！ 意外と手先が器用なんだね」

と言うと、冬將軍は照れながら

「そうでしょうか。きれいにできるといいんですけど」
と嬉しそうに言う。

冬将軍が貼った和紙をとおして、あたたかな陽射しが居間にそそいだ。今日が、一年を
通していちばん寒い日であるはずの「大寒」であることは、言わないでおくことにした。

冬将軍は、障子の最後の段を貼り終えると、ふーっと一息ついて、
「ところで、純クンはどうなるんですかね？」

と言った。純クンというのは、北国のドラマの主人公だ。冬将軍は物語のつづきが気にな
って仕方がないらしい。

夜にはおばあちゃんが、だんご汁を作ってくれたので、三人で食べた。お味噌仕立て
で、フキノトウも入っていて美味しかった。

二月三日（花曇り）

明け方、縁側から庭を見ていたら、梅の木につばみがほころんでいた。枝にとまったメ
ジロが楽しそうに歌っている。まもなく春がやってくる。



居間の片隅で、なにやらガシャガシャとさわがしい音がしたので振り返ると、冬将軍がヨロイを着てカブトをかぶっていた。

「あれ？ どうしたの？」

と聞くと、冬将軍は、

「そろそろ行かなければならないのです」と答えた。

「え？ どうして？」

「はい、もう帰る合図がありましたので」

「帰る合図？」

そう聞くと、冬将軍はこくりとわずいて、庭の方を指さした。

「メジロさんが歌い出したら、わたしの役目は終わりという合図なのです。と言っても、今年は何のお役にも立てませんでした」

「そ、そんな……」

冬将軍は姿勢を正して、ゆっくりと頭を下げ、

「たいへんお世話になりました」

と言った。ぼくの頬につうっとひとすじの涙がこぼれた。

「そんなのイヤだよ！ 帰っちゃったら、もうおばあちゃんの料理食べられなくなっちゃうんだよ？ それでもいいの？」

「決まりですから仕方ありません。春に冬将軍がうろろしてたら、色々ややこしいことになりますので」

「うろろって……。じゃあ、家から出なきやいいじゃないか。ここで一緒にババ抜きをしてようよ」

「残念ながら、そういうわけにはいかないのです」

「ドラマだって見終わってないんでしょ？ このあとの純クンを見届けなくてもいいの？」

「つづきは今度見せてください。それでは」

そう言って冬将軍は、縁側から庭に降り立った。ぼくは慌てて冬将軍の手をつかんだ。

「ちよっと待ってよ！ それならせめて……。え？ つづきは今度？」

「はい、今度」

「今度って……。またここに来てくれるの？」

「きっと」

「いつ？」

「たぶん、冬至の日に」

重そうなヨロイを引きずりながら去っていく冬將軍の背中に向かって、ぼくは何か別れの言葉を言うべきだった。でも、どうしても「さようなら」も「ありがとう」も言うことができなかった。どうしてここぞというかんじんなときにそんな簡単な言葉が言えないんだろう。他にうまい言葉も見つからない。それでも、何か言わなければと思い、

「シヨウグン！」

とぼくは叫んだ。そしてゆっくりと振り返った冬將軍に向かってこう言った。

「ふくはうち！」

冬將軍は、首をかしげて聞き返した。

「それって、なんですか？」

「しあわせのおまじないだよ」

「しあわせのおまじない？」

「そうさ。節分の日にはみんなしあわせを願って、そう言うんだ」

すると、冬將軍は初めてにこっと笑って、

「ふくはうち」

と言った。そして次の瞬間、庭の垣根を飛び越えて去って行った。

台所からおばあちゃんが出てきて、庭にいるぼくに向かって

「さあ、ご飯ですよ」

と声をかけた。おばあちゃんの持っているお盆には恵方巻が山積みになっていた。ぼくは、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている顔を袖で拭いながら

「おばあちゃん、そんなに作ったって、もうシヨウグンは……」
と言った。すると、おばあちゃんは、

「これなあ、今朝はやくからせんぶ、あんたのお友だちが作ってくれたんよ」
と言った。

「なんだか知らないけど、深々と頭を下げてねえ。『お二人で食べてください』って」

「シヨウグン……」

ぼくはまた涙があふれ出した。

「それと、ここうも言ってたわ」

おばあちゃんは、冬將軍のしゃべり方を真似して言った。「『ずっとずっと、あたたかかったです』って」

五月五日（さつき晴れ）

あのあとは、変わりばえのしない日々だった。ぼくは毎朝起きると、天気の様子を見ながら洗濯物を干し、学校に通い、すもうクラブで運動をして、帰ってくると計算ドリルの宿題に頭を悩ませ、おばあちゃんと二人でご飯を食べた。その繰り返しだったので、日記を書くのは久しぶりだ。

今日は、朝からあちこちでこいのぼりが空を泳いでいた。近くの池のそばには菖蒲の花が咲いていた。おばあちゃんは、お昼にちまきを作ってくれた。

ぼくは、庭に出て納屋から鍬を取り出し、庭の日当たりのいいところを耕した。そして、何粒もかぼちゃの種をまいた。

もしも、冬將軍が今年の冬至に戻って来るなら、今からその準備をしておかなきゃと思っ立ったのだ。

おばあちゃんから聞いたところによると、冬至にはかぼちやを食べるのがならわしらしい。

その日、もしも冬將軍が戻って来たならば、恵方巻のお礼として、今度はぼくがかぼちやの料理でもてなしてあげるんだ。

生まれ変わって何になる？

結城 博

よく晴れた五月の日曜日。

きょうは絶好のお出かけ日和だ。

出来立てほかほかのお弁当やお菓子といっしょに、ぼくはリュックサックに乗り込んだ。

「ちよっと重いかな」

リュックサックを背負ったおじさんが、ポツリとつぶやく。

(ええっ、ぼくはそんなに重たくないよ)

ぼくは、お荷物扱いされるのが嫌だった。

あのね、ぼくは、ペットボトル。おいしい新茶がたっぷり入っているよ。

「お弁当ありがとう。それじゃ、行ってくる」

おじさんは、奥さんにお礼を言くと、釣り竿とリュックサックを車の後ろ座席に乗せた。

おじさんの趣味は魚釣りだ。

「あまり無理をしないでね」

「お魚が釣れなくても、この前みたいに、お店でお魚を買ってごまかすのは、ダメだよ」
奥さんや子どもに冷やかされても、おじさんは元気いっぱいだ。

「きょうこそ大物を釣って、みんなをビックリさせてやるぞ」

車を運転しながら、おじさんは言う。

(そうでも、頑張ってください。ぼくは応援していますよ)

ぼくは、ただのペットボトル。

人のノドの渴きを癒すことしかできない。

だけど、ぼくは人間が大好きだ。

(犬さんや猫さんみたいな『ペット』のように、ぼくたち『ペット』ボトルも、人に寄り添って、いつまでも仲良く暮らしたいなあ)

走る車に揺られながら、ぼくは、駄洒落を思いついて、くすくす笑った。

(でも、ぼくは空っぽになったら、もう人間とっしよに暮らすことはできないのかな)

ぼくは、ちよっぴり不安になった。

リュックサックの隙間から車窓を眺めると、車は山奥を走っている。
どうやら、きょうは川で魚釣りのようだ。

おじさんは、アスファルト敷きの駐車場で車から降りると、釣り竿とぼくの入ったリュックサックを背負って、歩き出した。

しばらくすると、川の水が流れる音が聞こえてきた。

「よし、きょうはここにしよう」

「それにしても、ノドが渴いたな。そうそう、リュックの中に……」

おじさんは、釣りの準備を進めながら、ぼくのキャップを開けて、お茶をゴクゴク飲み始めた。

「美味い！ こんな空気のいい場所で飲むお茶は格別だ」

まだ魚も釣れていないのに、おじさんは、もう満足そうだ。

（喜んでくれて、ぼくも嬉しいです。さあ、魚釣り頑張りましょう）

ぼくは、おじさんのとなりに座らせてもらった。

木漏れ日に、きらきら光る川が美しい。

おじさんは、時折、ぼくのお茶を飲みながら、真剣な顔で、釣り糸を垂れた川面を見つ

めている。

「おっ、アタリが来たぞ！」

おじさんの声が弾んだ。

釣り竿がグンと曲がっている。

(これは、きっと大きな魚に違いない)

ぼくも、ワクワクしてきた。

「そうだ、慎重に……」

おじさんは、自分に言い聞かせるように、ゆっくりと釣り竿を上げていく。

(もう少しですよ。落ち着いてください)

ぼくも、おじさんといっしょに釣り竿を持っているような気持ちになった。

ようやく水面に、白くて大きな、魚の姿らしきものが見えた時だった。

「プチッ」

残念、突然釣り針が外れて、魚は逃げてしまった。

「あああつ、もう……」

おじさんは、がっくりと肩を落とした。

「休憩きゆうけい、休憩きゆうけい。少し早いすこしはやが飯めしにしよう」

おじさんは、奥おくさんが作つくってくれたお弁当べんとうを食たべ始めたはじめた。

「悔くやしい。あとちよっとだったのに……」

おじさんは、すっかりふて腐くされている。

(まだまだ、勝負しょうぶはこれからですよ)

ぼくの声こえは、おじさんには決けつして届とどかない。それでもぼくは、おじさんを応援おうえんしていた。

ところが、おじさんは、ぼくのお茶ちやを飲のみ干ほすと、とんでもないことをした。

「えいっー!」

おじさんは、空からになったペットボトルのぼくを、思おもいっきり川かわへ投なげ捨すてた。

ぼくは、どんどん川かわに流ながされていく。

「あああ、つまらない」

遠とほくでおじさんの声こえがした。

(どうしてこんなことをするの!)

ぼくは、何なにが何なんだか分からなくなった。

(空からっぽになったぼくは、もう用済ようずみ。魚さかなを釣つり逃のがした腹はらいせに、ポイ捨すてされた……)

ぼくは、人といっしょに暮らしたかっただけなのに。

悲しくて、涙が溢れて止まらなかった。

だけど、ここは川の中。どんなに涙を流しても、涙は川に飲まれて、誰も気づいてくれない。

ところが。

「どうして泣いているの？」

「よかったら、話を聞かせてよ」

川の水たちが、ぼくの涙に気づいてくれた。

「ぼく、ポイ捨てされちゃった」

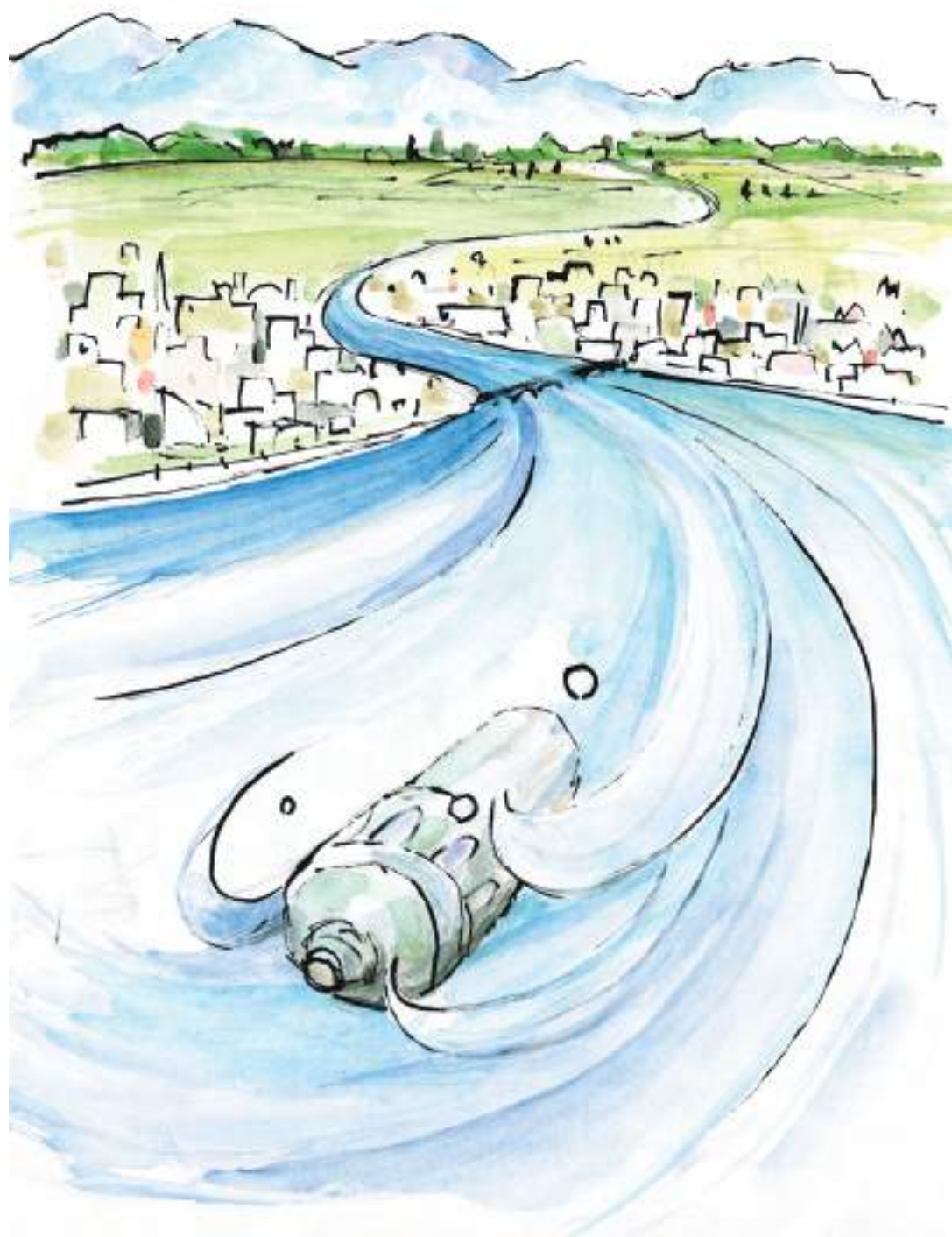
ぼくは、川の水たちに、これまでの出来事を話してみた。

「ひどいなあ。君に八つ当たりするなんて」

「自分勝手な人間なんか、大嫌いよ」

川の水たちは、口々に人間を悪く言った。

「でもね、たとえポイ捨てされても、ぼくは人を心から憎むことはできないよ。ぼくを。ペットボトルとして、この世に生み出してくれたのは、人間だもの」



「ぼくは、どんなに悲しくても悔しくても、やっぱり人間が大好きだ」

すると、川底をゆっくり流れる水が、穏やかな口調で話しかけた。

「気晴らしに、私たちといっしょに旅をしましょう。見知らぬ街や美しい風景を眺めていたら、きっと心も楽になりますよ」

(ああ、それもいい)

ぼくは、川の水たちと、流れに沿って旅をすることにした。

しばらくは川の流れも急で、森の木々しか見えなかったが、川幅が広がり流れも緩やかになると、いろいろな景色が見えてきた。

「わあ、今、大きな橋をくぐったわ」

「川沿いの道路を車がたくさん走っているね」

川の水たちは、まるでピクニックのようにはしゃいでいる。

(ちよっと、浮かれすぎだよ)

そう思ったぼくも、岸辺の草花たちに魅入られていた。

「まるで、緑の絨毯のようだ」

名も知らない草花たちが、岸辺にしっかりと根を下ろし、川の流に抗いながらも、

いっしょうけんめい生きています。

「なんと、たくましくて美しいのだろう」

それは、人間にポイ捨てされた悲しみさえ、しばらく忘れさせてくれるような、素晴らしい眺めだった。

川は大きな水門を、幾つも越えて流れる。

「君たち、なんだか、しよっぱくなくなったね」

ぼくは、川の水に話しかけた。

「もう海が近いからですよ」

川の水たちは、少し大人びた声で答えた。

「これからどうするの？」

ぼくは、川の水たちに尋ねてみた。

「私たちは、これから海の水になります。そして空に昇って雲になり、雨や雪になって、また地上に戻るのです」

すっかり塩辛くなった川の水たちの話を聞いて、ぼくは気づいた。

「ぼくは、君たちとは違う」

川や海、雲、そして雨や雪に姿を変えながら暮らす彼らと違って、ぼくは、いつまでも、ただの空っぽのペットボトルのまま。

こんなゴミのペットボトルなんか、何処にも行けやしない。旅は終わりだ。

「これまでありがとう。だけど、これから先、もういっしょに旅は出来ないよ。さようなら」
ぼくは、川の水たちと別れた。

そして、海に流れ込むと、ひとりぼっちで、あてもなく海面をぶかぶかと浮いて過ごした。
ときどきウミガメさんが、ぼくをクラゲと間違えて食べようとする。

「ウミガメさん、ぼくなんか食べたら、体を壊してしまうよ」
海の生き物たちが、プラスチックのゴミをご飯と間違えて食べて、死んでしまうことは知っている。だから、食べられないように逃げるのだ。

(ぼくは、人の暮らしに寄り添うことも、生き物の食べ物にすらなれない。役立たずのゴミなのだ)

気持ち沈んで仕方がなく、それでも海面を漂うだけの日々が続いた。

しだいに、心も荒んでいく。

ある嵐の夜のこと、荒波がぼくに近づいて言った。

「随分とボロボロになったねえ」

荒波は、ぼくをしげしげと見つめた。

「そりゃあ、毎日厳しい太陽の日差しや、あなたのような荒波に晒されては、こんな姿になっちゃいますよ」

ぼくは、苦々しく答えた。

「ごめんよ、ボロボロになったのは、確かに俺たちのせいかもしれないな。だけど、本当に悪いのは、君を捨てた人間じゃないのかい」

荒波が、不意に優しくそんな声で語りかけた。

(本当に悪いのは、ぼくを捨てた人間)

疲れたぼくの心に、人間に対する憎しみの欠片が生まれた。

「俺は、海を汚し続ける人間が許せない」

「どうだい、君も人間に復讐してみないか」

荒波がぼくにささやいた。

「復讐って、穏やかじゃないな」

ぼくは、平静を装って、荒波に答えた。

「俺は、海に漂うペットボトルなんかのプラスチックゴミを、太陽の紫外線も利用して、粉々に砕くことができる」

「君も、そんな姿は、もう嫌だろう」

「……ええ、もう懲り懲りですよ」

荒波は、「ニヤリ」として話を続ける。

「俺は、人間に捨てられたプラスチックたちを、今まで数えきれないくらい見て来たよ」

「俺は、君たちを細かな粒に生まれ変わらせた。俺の復讐の手伝いをしてもらうために」

荒波の低い声が激しい風雨に混じって響く。

「さて、復讐の計画を話そうか。まず、君は粉々になって、魚たちに餌と間違われて食べ

られる。魚たちには悪いが、これも作戦だ」

「そして、魚たちに食べられた君は、その魚を食べる人間たちの体に入り込むのさ」

「ぼくは、粉々になって人間の体に入り込み、体の中で悪さをして、恨みを晴らすのかい」

ぼくは、輝きの失せた瞳で荒波を見つめた。

「そうだ。君をゴミにした人間たちに復讐するのさ。もう簡単には、回収も出来ないくら

いに粉々になったプラスチックとなって」

「人間たちは、砕けて細かな砂粒のようになったプラスチックを、『マイクロプラスチック』と呼んでいるそうだけ」

(マイクロプラスチックとやらになるのも悪くないか……)

ぼくの心を見透かしたように、荒波の眼が、稲妻に照らされて怪しく光る。

「さあ、これから君は、ペットボトルからマイクロプラスチックに、生まれ変わるのだ」

ぼくは、荒波に取り込まれそうになった。

「だけど……」

「やっぱり、ぼくは、イヤだ！」

ぼくは、荒波の「人間に対する復讐」を、ギリギリのところで断った。

「なんだ、つまらない。ただの意気地無しだったのか。それなら、こうしてやる」

荒波は、ぼくを砂浜に押し流した。

「そこで、砂浜の泥に埋もれて、いつまでもがき苦しむがいい」

荒波は、そっぽを向くと沖に帰って行った。

「そうさ……これでよかったんだ」

ぼくは、誰もいない夜の海辺でつぶやいた。

嵐の夜から月日は流れ、ぼくがポイ捨てされてから、はや一年が過ぎようとしていた。季節は巡り、砂浜には、また初夏の爽やかな風が流れている。

その風を、ぼくは、砂浜の泥に首まで埋まって受けていた。

「ぼくの体は、自然の土には戻れない。マイクロプラスチックにはならずには済んだけれど、ずっと薄汚れたゴミで、泥の中。情けないな」

ぼくは、いつものように、それ以上考えるのはやめて、居眠りをして過ごすことにした。すると、その日は朝から、砂浜にたくさんの人が集まって来る。

(人間か。居眠りの邪魔だ。海水浴の季節でもないのに。早く帰ってくれ)
ぼくは、もう、誰にも会いたくなかった。

「お父さん、あれ、ペットボトルだ」

「そうかい、よく分からないなあ」

人間の親子が近づいてくる。

二人とも、両手に新品の白い軍手をはめて、大きなポリ袋を持っている。

「ねっ、やっぱり、ペットボトル」

「ああ、ほとんど泥に埋まっているけれど」

親子の会話に、ぼくは「ほっといてくれ」と言いたくなくなった。

「よしよ、お父さんも手伝ってよ」

「わかった、任せてくれ」

親子は、軍手を泥まみれにして、ぼくを掘り出し、ていねいに泥を取り除いてくれた。

「わーい、ペットボトル一本、回収成功！」

子どもが、嬉しそうに元気な声をあげた。

「よし、ペットボトルはこっちの袋だったな」

ぼくは、空っぽのペットボトルがたくさん入ったポリ袋に、放り込まれた。

「おう、新入りだ。仲間が増えたぞ」

「こんなにボロボロになって。お疲れ様です」

空っぽのペットボトルたちが、ぼくに話しかけてくる。

「これは何の騒ぎですか？」

ぼくは、事情がさっぱり分からない。

「ボランティアの人たちが、砂浜の掃除に来たのですよ」

「ああ、ゴミ掃除に来たのか。ぼくは、あのままでもよかったのに」

ぼくは、素っ気なく答えた。

「そんなことを言っではいけません。あの人たちは、私たちをただのゴミだなんて、思っ
ちやいませんよ」

コーヒートのペットボトルが、ぼくに言った。

「そうですとも。私たちが入っているポリ袋に、印刷された文字を読んでみてくださいいな」

ぼくは、オレンジジュースのペットボトルに言われて、透明なポリ袋に書かれた文字を
読んでみた。

『リサイクル・資源回収袋』

ぼくには、まだ意味が分からない。

「私たちは、ゴミではないのです。リサイクルされる資源なのです」

「リサイクルって？ ぼくは回収されて燃やされるか埋め立てられるんじゃないの」

ぼくは、キャップが無くなった口を、ポカんと開けたままだ。

「オレたちは、リサイクルされて、新しい製品に生まれ変わるのさ」

スポーツドリンクのペットボトルが、元気よく語る。

「嬉しい……」



ぼくは、それ以上、言葉が出なかった。

耳を澄ますと、ぼくを拾ってくれた親子の会話が聞こえてくる。

「あのね、正直に言うよ。お父さんは一年前、魚を釣り逃した腹いせに、ペットボトルをポイ捨てしてしまった。『悪いことをした』と、とても後悔したよ。だから、今回のボランティア活動には、どうしても参加したかった」

よく見ると、その人は、ぼくをポイ捨てしたおじさんだった。

「正直なお父さん、カッコいい。ねえ、もっとたくさん回収しましょう」

子どもさんが笑顔で応える。

「どっちがたくさん回収できるか、競争だ」

「お父さん、わたし、負けないよ」

ぼくは、微笑みながら、泣いた。

（あの時、荒波の誘いに乗ってマイクロプラスチックになってしまっていたら、こんな幸せな気持ちには、決してなれなかった。本当に「イヤだ」と叫んでよかった）

その時、ポリ袋の隅っこで、何か考え事をしていた紅茶のペットボトルがつぶやいた。

「私たちをポイ捨てしたのは人間。泥まみれになって回収してくれたのも人間。人間って

分からない。どちらが本当の姿だろうか」

朝から始まった砂浜のボランティア活動は、夕方まで続いた。

「今回も大漁か。困ったものだ」

ボランティアのリーダーらしき人が、うず高く積み重ねられたポリ袋を見て嘆いた。

「大漁旗で飾りましょうか……あつ、いえ、本当は、こんな回収作業をしなくても、すべて

リサイクルされるのが理想ですよ」

若い男の人が、冗談を言いかけて、やめた。

（そうだ、ぼくらは、人間がきちんとリサイクルしてくれたなら、あの水たちのように姿を変えて、いつまでも人の暮らしに寄り添うことができるんだ）

ぼくは、二人の話を聞きながら思った。

ぼくたちを乗せた軽トラックが、夕陽を浴びて、リサイクル工場に向かって走り出した。

「ねえ、生まれ変わって、何になる？」

「オレは、サッカーのユニホームになるぞ」

「わたし、かわいいカーテンになりたいの」

「ランドセルになって、学校に行きたいな」

ぼくたちは、自分の夢を語り合った。

みんな、楽しみにしていた遠足へ出かける子どものように、はしゃいでいる。

リサイクル工場に到着したぼくたちは、いくつかの工程を経て、「フレーク」や「ペレット」と呼ばれる粒になった。

粒たちは、新たな誕生を待つ卵のようだ。

卵たちは、無垢な透明で、きらきらと光る。

それはきつと、ぼくたちの夢が輝くから。

ぼくたちは、リサイクル工場から、別の工場に運ばれた。

「ああ、ぼくの夢は……」

ぼくの心に、海に向かう旅の途中で見た、川の岸辺に広がる草花、『緑の絨毯』が、鮮やかに広がってゆく。

「君の夢を叶えてあげるよ」

工場で、人の優しい声が聞こえた気がした。

なぜだろう。とても眠たくて……。

やがて、ぼくは目を覚ますと、同じ夢を持つ仲間たちといっしょに、若草色のカーペツ

トに生まれ変わっていた。

ぼくは、今、ビルの応接室に敷かれています。

また、人の暮らしに寄り添うことが出来る。とても嬉しい。幸せだ。

だけど、人間にゴミとして捨てられたことを、ぼくは、忘れてしまうことが出来ない。

「……次は、深刻化する海洋プラスチックゴミ汚染の現状をお伝えします……」

ぼくのいる応接室のテレビから、今日も悲しいニュースが流れる。

人間の皆さん、ぼくたちが与えられた役目を終えたとき、どうか、そっと尋ねてほしい。

「生まれ変わって、何になる？」と。

たとえ、ぼくらの声は聞こえなくても、ぼくたちの「夢」は、きっと届くと信じている。

ぼくたちの「夢」を叶えてくれるのは、人間だけだから。

思いをつなぐ しあわせプリン

みやぞの せいこ

日曜日にちようびの朝あさです。まみこが起きると、一階いっかいのリビングは、甘い香りかおに包つつまれていました。まみこはこの香りかおをよく知しっています。砂糖さとうをまぜて甘あまくした牛乳ぎゅうにゅうを温あためて、卵たまごのこくをプラス、仕上しあげにバニラエッセンスを加くわえた香りかおです。

「プリン！ お母かあさん、プリン作つくっているんでしょう？」

まみこは、キッチンを覗のぞきました。

「あら、おはよう。そうよ、あとは蒸むすだけ。」

お母かあさんは、フライパンに浅あさくお湯ゆを張はっています。お湯ゆが煮にえたら、プリン液えきを流ながし入れたガラス容器ようきをフライパンにのせます。ふつつつもしないくらいの、本ほん当とうにごく弱よわ火びで蒸むすのです。途中とちゆう、水滴すいてきが落おちないように、ふたを濡ぬれ布巾ふきんで覆おおうことも忘わすれずに。蒸むされ具合ぐあひを見張みはりながら、お母かあさんはコンロから離はなれません。



「オーブンを使えばいいのに。」

まみこは言いました。オーブンなら、蒸し焼き調理機能があるので、細かい調整もいりません。チーン！と鳴ったら、完成なのに。

「こういう細かいことが、おいしくなる秘密なのよ。」

お母さんは笑いました。

「ちはるちゃんのアドバイス？」

まみこが聞くと、

「そうよ、ばあちゃんの知恵袋。」

と、お母さんは冗談めかして言いました。まみこだって、プリン作り方くらい知っています。こうやって、お母さんが作る様子をたびたび見てきましたから。でも、まみこにはまだ、どうしてもうまく作れません。最後の「蒸す」ところで、「す」がたってしまうのです。これは火が強いための失敗です。つるんとした見た目のプリンではなく、表面にプツプツ、小さな穴がたくさん空いたプリンになってしまふのです。舌触りも滑らかではありません。それでも「おいしい」と、家族は食べてくれますが。まみこはどうも納得できないまま、最近はおっぱら、お母さんの作ったプリンを食べるばかりです。

「さあできた。あとは冷やして出来上がり。」

お母さんは満足そうです。プリンひょうめんの表面は、さっきより、落ち着いた黄色きいろをしています。つるんとキズひとつもなく、もちろん「す」なんかたっていません。今日のプリンもきつと、おいしいことでしょう。

「あー、おいしそう！ ねえ、このプリン、いつ食べるの？」

まみこは、プリンをじいっと見つめます。

「今日は、これ持って、ひいばあちゃんちに行こうと思ってるの。まみこも行く？」

「えっ、ちはるちゃん、帰って来ているの？ 行く！」

まみこの顔は、パツと明るくなりました。

「ちはるちゃん」とは、まみこの曾祖母、つまり、ひいおばあちゃんのことです。「ちはるひいおばあちゃん」とは呼びにくくて、まみこは小さい頃から「ちはるちゃん」と呼んでいます。数年前に、ひいおじいちゃんが亡くなったあと、ちはるちゃんは高齢者施設で生活しています。一見すると元気そうなのですが、米寿のお祝いも近くなってきました。ちはるちゃんは年々、家の階段や段差につまずき、小さなケガをするようになったのです。大きなケガにならないうちにと、入所を決めたのでした。でも週末や、年末年始は家に

帰かえってきます。ちはるちゃん家は今いま、ちはるちゃんの娘むすめ夫婦ふうふ、つまりまみこのおじいちゃんとおばあちゃんが住すんでいます。

午後ごご、出来上できあがったプリンを持って、まみこはお母かあさんと出でかけました。

「こんにちはー、来たよー。」

お母かあさんが声こえをかけました。玄関げんかんには、ちはるちゃんが愛用あいようしている、花柄はながらのステッキがかけてあります。

「あらあら、二人ふたりともいらっしやい。」

おばあちゃんたちより早く、ちはるちゃんが声こえをかけます。段差だんさを心配しんぱいする周囲しゅういをよそに、まみこたちを出迎でむかえようと立上たあがります。

「ばあちゃん、座すわっててよ！ 転ころんだら危あぶないから！」

お母かあさんが一人掛ひとりかけソファーに、ちはるちゃんを座すわらせます。

「あらまあ、そんなに怒おこらんでえー。」

ちはるちゃんは、怒おこられているのに、ケラケラ笑わらっています。

「そうそう、プリン持もってきたの。ちようどおやつの間じかんだし。みんなで食たべようよ。」

お母かあさんは、保冷ほれいバッグからプリンを取り出としました。長方形ちようほうけいの耐熱たいねつガラスの容よう器きから、

食べる分だけを大きなスプーンですくって取り分けます。プリンカップもいいけれど、まみこにはこっちのほうが断然おいしく感じます。すくった容器の底に見えるのは、濃いカラメルソースの海。

「ああ、おいしいねえ。力がみなぎってくるよ。ありがとうねえ。」

ちはるちゃんは、目をいっそう細めておいしそうに食べています。

「ばあちゃん直伝のレシピだもの。遠慮せずいっぱい食べてね。」

プリンをすすめるお母さんは、ちよつと照れています。まみこもプリンを食べました。甘くて冷たくて、つるんと喉を通ります。後味に残るカラメルのほろ苦さは、プリンの甘さを引き立てて、まさに絶妙です。

「はー！ おいしいー！ おかわりー！」

プリンを食べたあと、まみこは、ちはるちゃんと折り紙をしました。ちはるちゃんの手から手品のように、折り紙の花や動物が生まれます。

「そういえばさ、お母さんにプリンの作り方教えたのって、ちはるちゃんなんでしょ？」

まみこは訊ねました。

「ああ、そうだよ。」

「じゃあさ、ちはるちゃんはプリンの作り方、だれに教えてもらったの？ やっぱりお母さんとか、おばあちゃん？」

まみこの質問に、ちはるちゃんは折り紙の手を止めます。

「ああ、話してなかったかね。あたしがプリンを初めて食べたのは、まみちゃんくらいの歳でねえ。そうだね、まだ日本が戦争をしているころだね。」

「戦争をしているころ…。」

まみこは、ごくりと唾を飲みこみました。

ちはるちゃんには、お兄さんが二人、すぐ下に妹と、まだ小さな弟がいたことは、まみこも知っています。五人のきょうだいくらい、昔は普通だったそうです。

「一番年上の兄さんは戦争に行っているし、あたしも家の手伝いをしたよ。小学校が終わってからね。畑もあつたし、一番下の弟は体が弱かったからねえ。しよっちゅう寝込んでいたよ。」

当時、ちはるちゃんの実家は、農業を営んでいました。街の中心部から離れた村で、空襲にもあわずにすんでいたそうです。農作物の収穫で、家族や村人は飢えずに暮らしていたといえます。ときには都会から物々交換に来る人にも、食べ物分けました。それに

しても……。と、まみこは思います。小学生も大人と一緒に働くなんて。まみこは五年生ですが、考えただけでクタクタに疲れてしまいそうです。

「いつだったかね、村の外れに若い兵隊さんが倒れていたんだ。大きな荷物を背負ってた。」
「だれだったの？」

「うわさでは隣の村の山手に、アメリカ軍の飛行機が不時着した、って話を聞いた。脱走兵がいたとも。」

脱走兵と聞いて、まみこはぞくりとしました。

「その人だったの？ アメリカ人？」

「おそらく。アメリカ兵は敵だと教えられてたんだけどね、あまりに弱ってたもんで。気の毒に思ってた村の人たちで、診療所に運んだんだ。」

「こわくなかった？ アメリカ人の脱走兵でしよう？」

まみこはこわごわ聞きました。

「いや、全然。それくらい弱ってたんだらうね。だから、うちの使っていない納屋でかくまってた。ひどいケガもしていたようだったからね。」

まみこは、頭がくらくらしてきました。アメリカ人の脱走兵をかくまう。あれ、何の話

だったけ。プリンにつながる糸口は、今のところ、全く見えません。ですが、ちはるちゃんの話の続きは気になります。

「兵隊さんは、だんだん元氣になってね。驚いたことに、日本語が喋れよった。畑に出せば、天気やら野菜なんかにも詳しくなったもんで、みんなもそりゃあ驚いていたよ。」

ちはるちゃんは、楽しそうに話します。

「いい人だったんだね、その人。」

「そうそう。そんである日、兵隊さんが、何かお礼がしたいと言いだしてね。うちの土間で、プリンを作ってくれたんだ。」

「えっ？ どういうこと？」

まみこは、戦時中の出来事と、やっと話に出てきたプリンが、どうしても結びつきません。不意打ちをくらった感じがします。

「鶏の卵に、飼っていたヤギの乳、ほんの少しの砂糖、あとはカボチャを潰してね。混ぜてこして、茶碗に入れて、蒸し器で蒸したら、プリンのできあがり。そう作り方を教えてくれたんだが、兵隊さんとはにかく、手際がよかったねえ。」

まみこは今朝、お母さんのプリン作りを思い出していました。材料の卵やカボチャはと

もかく、ヤギの乳、砂糖はほんの少し。カラメルなんて、まずないでしょう。

「ええー、それで、おいしかった？ そのプリン…。」

まみこはあんまり期待せずに聞きました。

「もちろん！ 甘くてやわらかくてねえ。茶碗蒸しみたいなのに、そうじゃない。そりゃあ、今みたいなきれいなプリンじゃなかったけどねえ。外国の人は、こんなにおいしいものを食べているのかって、家族みんなで驚いたんだよ。」

ちはるちゃんは、興奮気味に話します。

「特に、一番下の弟がねえ。そりゃ喜んでねえ。いつもいつも青白い顔して寝付いてたのに。兵隊さんの作ったプリンなら、パクパク食べて、おまけに元気になったって、家族じゅう大喜びだったんだよ。」

まみこは、うんうんと頷きました。ここは理解できる気がします。プリンの基本的な材料は、牛乳、卵、砂糖です。どれも栄養豊富で、体の中で力の源になる食材だと、家庭科の授業で習いました。

「だから、いつのまにか、その兵隊さんがうちにいるのが普通になってたよ。弟もずいぶんなついてたからね。だけどね…。」

ちはるちゃんは、遠くを見ました。

「だんだん戦争が激しくなつて、あたしらが住んでいた村も、空襲を受けるようになったよ。」

村人総出で防空壕を掘ったり、水をためておいたり。ちはるちゃんたちは、すぐ避難できるように準備していたそうです。だんだんアメリカ軍の機銃掃射も始まって、近くの村の被害も聞かれるようになってきたのです。

「アメリカ兵をかくまっているって、ひどい言われ方もされたけど。今さら、兵隊さんを追い出すつもりはなかったよ。」

ちはるちゃんは、ふん、と鼻を鳴らしました。

「その日も空襲警報が鳴ったんで、みんなで防空壕に逃げただけど。」

「だけど？」

「下の弟が逃げ遅れてね。まずいと思っただらう、兵隊さんがすぐ家に戻って、連れ出してきてね。火の粉を浴びないように、布でくるんで脇に抱えて。防空壕に向かつて走って逃げてきた。でも……。」

淡々と話していたはるちゃんの声が、いつからか震えています。

「ちはるちゃん、大丈夫？」

ちはるちゃんの肩にそっと手を添えて、まみこははっとしました。ちはるちゃんの一番下の弟さんは、空襲で亡くなったと、まみこも聞いていたからです。ちはるちゃんは、ふりしぼるように続けます。

「こっちに走ってくるのは見えた。もう少ししてところで二人とも、いっぺんに。」
焼夷弾を落とす飛行機が飛び去って、辺りの煙が静まったころ、ちはるちゃんたちはそろそろと、防空壕から出ました。見るとすぐ近くに、兵隊さんと弟が倒れています。二人とも、もう息はありませんでした。

「兵隊さんはね、弟を抱きかかえたまま、かばうような格好だった。」

まみこは、ちはるちゃんの背中を、さすりながら話を聞いていました。ちはるちゃんはまだこの前ではいつも明るく、元気に笑っています。今みたいに声と肩をふるわせて、背中をよりいっそう丸くして話すちはるちゃんを、まみこは初めてみました。つらい戦争の記憶は、戦争が終わってからもずっと、ちはるちゃんを苦しめてきたのでしよう。「でもね、それからすぐに戦争は終わった。次の年の春になって、亡くなった兵隊さんの家族が、遺骨を引き取りに来てくれて、あたしらもそれはそれは喜んだよ。ああ、終わっ



「たんだって泣いた気がする。」

ちはるちゃんは、穏やかな口ぶりに戻っていました。

「大人になって、ひいじいちゃんと結婚して。生活は楽じゃなかったけどね、あたしは生きていくんだからって、いつも奮い立たせていたよ。」

ちはるちゃんの歩んできた道は、まだ十一歳のまみこには想像もつかないほど、大変だったことでしょう。

「だけどね、つらいときや、ここ一番の頑張りどきには、プリンを作っていたよ。おばあちゃんもお母さんも、まみちゃんも食べてきたプリンよ。」

そう言ったちはるちゃんの顔は、いつもと変わらない、しわくちやの柔らかい笑顔に戻っていました。

「プリンは栄養満点なんだ、カガみなぎって心も体も元気にしてくれるんだから。」
懐かしそうに話すちはるちゃんに、うんうんと、まみこも頷きます。

「プリンにそんな思い出があったなんて、わたし全然知らなかった。ああでも、聞けてよかった。ちはるちゃん、ありがとう。」

まみこは、ほっとして言いました。

「お母さんもこの話、聞いたの？」

「ああ、話したと思うよ。」

ちはるちゃんが、仏壇の方に目配せをしました。見ると仏壇には、プリンが供えてあります。

「お母さんたら、いつのまに。」

ちはるちゃんは嬉しそうに笑っていました。

帰りの車の中で、お母さんが言いました。

「ばあちゃん。あつ、ちはるちゃんね。本当にプリンが好きよね。喜んでもらえてよかったわあ。」

「うん。プリンは、ちはるちゃんにとって、大切な思い出の食べ物だったんだね。」

まみこも、頷きながら言いました。

「お母さんもね、ちはるちゃんとおしゃべりしながら、よく手作りプリンを食べたのよ。ちようど今日のままこみたいにね。」

お母さんは、懐かしそうに言いました。まみこは、思い浮かべます。こども時代のお母さんが、ちはるちゃんと手作りプリンを食べているところ。きっとそんなときに、お母さん

んもちはるちゃんから、さっきの話を聞いたのでしよう。

つらい出来事は、人に話すと少し軽くなると、まみこは思っています。ですがまだまだちはるちゃんの悲しみは深く、この先も忘れることはないでしょう。戦争は、まみこのお母さんも、おばあちゃんも、経験したことはありません。だからこそ忘れてはいけない、忘れないために、何らかの形で残さないといけません。まみこたちにとって「プリン」は確かに、その役割を担っているように思っています。

「よおし！ こうなったら、プリンの作り方、わたしもマスターするぞ！」

まみこは力強く言いました。

「ええ？ 何？ まみこ、どうしたの急に。」

お母さんが驚いています。

体にも心にも、栄養満点のプリン。まみこが目指すのは優しい甘さで、喉ごしは滑らかな、もちろんおいしいプリンです。大切な誰かを思いながら、細かいところも丁寧に作る。車の窓から見える、夕方のひつじ雲をながめながら、まみこは思いました。

総 評

子どもたちの夢を育み、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」は、今年で第四十二回を重ねることができました。応募してくださった方をはじめ関係者の皆様の御協力に深く感謝します。応募数は、全国三十八道府県から、第一部（保育園児・幼稚園児・小学校低学年児童向け）に九十九点、第二部（小学校中・高学年児童向け）に百六点の総計二百五点でした。

応募作品のジャンルも、体験を基にした生活童話、ファンタジー、郷土に伝わる伝説等に題材を得た作品など、多様な種類の創作童話で力作ぞろいでした。家族愛、思いやり、友情、信頼、自然愛、希望など、募集の趣旨に沿った作品が寄せられました。多くの方が、次代を担う心豊かな子どもを育成したいという願いのもと、「子どもに聞かせたい創作童話」を創作されたことが、一番の子どもたちへの贈り物だと思います。

子どもたちの感性や価値観は、実に純粋でストレートであり、旺盛な好奇心に支えられています。だからこそ、子どもたちに読ませたい、聞かせたい童話の創作には、どれだけ子どもの視点に立つことができ、かが必要になります。今回、入賞された作品は、子どもの特性や感性を深く理解しながら、子どもの視点にたって創作されたものでした。ですから、子どもたちがこれらの作品に触れたとき、自分が共感できる言葉や考え、ストーリーの展開であることを感じ、お話そのものの面白さを感じるようになります。

今回、応募された作品のほとんどが、子どもたちが親しみやすく、平明で読みやすい文章で書かれました。これは、作者の方々が、子どもの視点に立った作品づくりを目指していることの表れであると感じました。ただ、審査の中で、作品の題名と内容が合わず、子どもたちに伝わりにくくなっている作品も散見されるとの意見もありました。子どもたちが、作品を手にしたときに、思わず読んでみたいと感じるような題名になるような工夫もお願いしたいと思います。

中には、難しい言葉遣いやテーマの一貫性に一考を要する作品もありましたが、総じて読みやすく、比喩表現を効果的に活用するなど、年齢や学年の段階を考慮した表現上の工夫も見られました。作品集は今後、学校・幼稚園などで教育資料として教育活動に活用されることもあるので、今後も表記・表現については丁寧に扱う必要があると考えます。

以下、各部ごとに、審査で話し合われた内容をお示しします。

〈第一部〉

全体的に感じたこと

○ 第一部は、保育園児・幼稚園児・小学校低学年児童を聞き手（読み手）としている。これを意識して、登場人物の設定や場面の展開等を工夫している。楽しく読み進めることができ、心温まる作品が多かった。

一方、対象となる聞き手（読み手）には、難しいと思われる主題や文章表現がある作品も見られた。対象を意識した創作をお願いしたい。

○ 個性的な登場人物たちが様々な物語を展開していく作品が多く、楽しく読めた。一方で、発想や着想は面白いのだが、説明の部分が不足していたり、物語の設定や展開が分かりにくかったり、山場が物足りなかったりして、主題が明確でない作品があった。

○ 子どもの空想性に働きかけるファンタジー作品は現実と空想が交錯する面白さがある。物語が現実から空想へ変わっていくときに、聞き手（読み手）が違和感をもたないような工夫をしてほしい。

〈第二部〉

全体的に感じたこと

○「子どもに聞かせたい創作童話」という趣旨に沿った、楽しく夢のある作品や感動あふれる作品が多かった。

○ 第二部は、小学校中・高学年児童を聞き手（読み手）としている。そのため、家族愛、思いやり、平和、友情、協力、勇気、心の葛藤など、子どもたちを取り巻く様々な問題をテーマに、作者の思いや願いを表現した作品が多くみられた。

○ 登場人物の設定や場面の展開が明解で、期待をもって読み進めることができる作品が多かった。一方、山場がなく平板な構成になっていたり、結末に向かう中で主題が不明確になったりする作品もみられた。構成段階での練り上げが大切である。

○ 会話を効果的に生かし、情景を伝えている作品が多く、対象とする子どもたちにも場面の様子や登場人物の人物像が伝わるよう工夫されていた。

入賞作品の選評

〈第一部〉

特選 「おしゃれな百地蔵」

阿部 忠彦

- 民話風の話がテンポよく流れていて、低年齢の子どもたちにしては少し難解な言葉も散見されるが、「ひいふうみいよう…」という古来の数え方が、子どもたちの心に残るのでは。
- 村の百地蔵の世話をしている八兵衛の、いつも地蔵様をきれいにしておきたいという一生懸命さがよく描かれているし、(このことが後半の話に大いに関係してくる大切な部分) また、八兵衛が、毎日点検する「ひい、ふう、みい、よう」というおもしろい声を聞いて、母狸にたずねた子狸は、本当に百あるか数えてみようという興味をそえられる。子狸が一生懸命に数える様子もほほえましく描かれている。たくさんの物を数えるとき、途中でどこまで数えたか分からなくなるとい子狸のとまどいにも、子どもたちは共感できると思う。
- 後半では、二人のそれぞれの一生懸命さが交互にくり返されて、お互いの思いが理解されないまま、読む者ははらはらせるが、おしまいには、顔は直接合わせないものの、八兵衛と子狸の心が通じ合うというほっこりとした楽しい話になっている。
- しかし子狸が付けた地蔵の頭の赤い印を見つけた村人たちが、八兵衛に「なまけとらんと早う、地蔵様の頭をそうじせんかい」と言いつのる場面があるが、話の中の一部分とはいえ、せっかく全体がほっこりとした話になっているのに、そんなあなたたかい雰囲気をごわしているような気がする。村人たちもきっと八兵衛と同じように百地蔵への信仰も親しみも深いに違いないし、世話をしてくれる八兵衛に対しても感謝の気持ちを持っているに違いないからだ。この部分をもっとやわらかい言い回しに考えてみるのも一考だと思ふ。

入選 「びっくりさせちゃうぞ」

向風 歩

- 小さくてまるいふうせんのような姿で、人にはまだ見えない子どものおぼけ。人をびっくりさせることで大きくなり、人にも見えるようになるという独創的なおぼけの発想がおもしろい。

- フウのお父さんは大入道で、お母さんは吸血鬼という、おどろおどろしいおばけ一家だが、大入道のお父さんは、お化屋敷で働いていて、お母さんはお供のコウモリをいっぱい従えて、こわい映画の大スターというのも読む子どもたちをほっとさせそうだ。また、子どもたちは、初めて、見知らぬ世界にふみ出すフウの、不安な気持ちや、早く大きくなりたいという思いで勇気を出して、人間の町へ飛んでいくフウの気持ちにも寄りそいながら読むことだろう。
- 町に出たフウ。ただびっくりさせようと思っただけだが、意に反して、人を悲しませたり、仕事のじゃまをしたりすることにつながり、悩みはじめる。でもぐうぜん、橋の上でサイフを落とした女の子を助けたことで、「みんなが笑顔になるびっくり」だってあることに気づき、「これからは、そんなびっくりをたくさんさがすぞ」と、暗くなっていた心に元気を取りもどす。
- そんなおばけのフウの優しさが伝わるあたたかい話だ。
- 短く、平明な文章で書かれているので、低年齢の子どもたちでも、フウの心の動きにそいながら読み進めていけるいい作品だと思う。

入 選 「ニッツとヤールののはたけしごと」

鵠沼 更紗

- イソップ寓話をよんでいるような、ユーモアいっぱいの子供話である。ニッツとヤールの、「ぼくは、ここでみはっているから」―「それはよいかんがえだね。」というフレーズの繰り返しは、二人の対照的な性格を際立たせ、読者を次第に童話の中に引き込んでいく効果がある。また、イソップ寓話などの昔話で多用される、戒めにつながるような結末とは異なり、ヤールはどんな目に遭っても、疑いもせずニールを信じ抜き、ニッツはお城での体験を通して考えや行動を改め、二人仲良く暮らしていくというハッピーエンドが、現代の子どもたちの心を温かくしてくれるのではないかと思う。

- 対照的な兄弟の人物像は、この童話の大切なプロットとなるので、ニッツの行動描写にある「すやすや」を「ぐうぐう」にするなど、登場人物の人間性を表す表現を工夫すると、さらに面白い作品になると思う。

入 選 「やまとくんのたからもの」

弓場 貴子

- 抜けた人間の歯を、ねずみが宝物と交換してくれるという発想が面白い。また、ねずみの歯医者の子チュー先生や新

〈第二部〉

特 選 「冬將軍日記」

関根 裕治

しい齒を熱望するねずみたちの姿もユーモラスに描かれていて楽しい。やまとくんは「たからもの」を手に入れるために、ねずみたちは「新しい齒」を手に入れるために、一緒に嘆いたり、力を合わせたりする姿は、読者の共感を呼び、心をほっこりさせてくれる。現実とは違うけれども、ひよっとしたら自分の周りでも起こっているかもしれないと、若い読者の心をワクワクさせてくれる作品である。

○ タイトルにある「たからもの」が何を指すのか、一読しただけではわかりにくい。お母さんのために、紙粘土で一生懸命花を作るけれどもうまくいかない場面があると、タイトルやラストの場面が理解しやすくなるのではないかと思う。

○ 「今日からぼくは、日記をつけることにした。」という出だしが子どもたちにとって身近で、すっと物語に入っていくことができる。実在しない「冬將軍」を人物に仕立て、季節の行事を通した僕と冬將軍とのやりとりがほっこりする作品となっている。

○ 出番がないことを嘆く冬將軍と僕は、おばあちゃんが作ったおせち料理やだんご汁を食べたり、花札やトランプをしたりしながら日を重ねるごとに仲良くなっていく。いよいよお別れの日がやってきた時、言うべき言葉がみつからない僕が言ったのは「ふくはうち!」。冬將軍の幸せを願う気持ちが詰まったこの一言にグッとくる。

○ おばあちゃんもこの物語に温かみを添えている。ヨロイとカブトを付けた冬將軍を見た時、「ほら、うちに上がるときはそんなコートや帽子は脱ぎなさい。」と言ったのは、見えているのに見えていないふりをしたおばあちゃんへの優しさではないかと思う。冬將軍が出ていった後、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている僕に、「これなあ、今朝はやくからぜんぶ、あんたのお友だちが作ってくれたんよ」と言う下りは、読者をしんみりさせる。読み手によつては、架空の冬將軍とおばあちゃんのやりとりで違和感をもつ場合も考えられるので、おばあちゃんも子どもの頃に見たことがある等、冬將軍とおばあちゃんの接点についての記述が少しあると物語がさらにすんなり読み進められると思う。

○ 「こはるびより」「うららか」「しぐれ」など、残したい季節を表す日本古来の美しい言葉や風習が、おばあちゃんと僕とのやりとりで誰にでも分かりやすく描かれている。改めて大切にしたいと思わせる。

○ 捨てられたペットボトルの旅の物語を通して、海洋プラスチックゴミ汚染の問題について、学び、考えることができる作品である。「ペットボトルが捨てられるという事件」「失意の川の旅、そして、人間への復讐を囁く荒波の誘惑」「人間の資源回収活動による救出」「夢であったカーペットに再生」と、起承転結がしっかりしており、ペットボトルが語り手となっている面白さがある。また、海洋プラスチックゴミ問題を引き起こしているのは人間であるが、それを解決できるのも人間であるという希望を語る物語であり、高学年の児童が読むのにふさわしい内容・構成となっている。

○ 川に捨てられたペットボトルが、川の景色を見ているうちに元気になっていく場面は、「スイミー」のワンシーンを思わせたり、人間の矛盾する側面を指摘した「人間って分からない。どちらが本当の姿だろうか。」という紅茶のペットボトルの言葉は、「手袋を買いに」の最後の場面を思わせたりするなど、他の児童文学のワンシーンと重ねて読む楽しみもある。

○ ペットボトルが資源の循環サイクルの中に組み込まれて、緑の絨毯に生まれ変わるというラストに向けて、前半の川の旅の場面では、水の循環のことが語られたり、緑の絨毯のような草花に魅入られた様子が描かれたりと、伏線が散りばめられた巧みな構成になっている。

○ 環境問題について学べる作品であるが、「物語」をしっかりと描くことをもう少し大切にするとよいのではないかと印象をもった。知識を伝えることを意図していることが明らかに感じられる解說的な叙述や会話文が散見されるが、それよりも、中心人物の心情の変化を丁寧に描き、「ぼくは、微笑みながら、泣いた。」というクライマックスを際立たせる工夫をすることに注力した方がよかったように思う。

例えば、荒波の誘いに対して大きく揺れ動く心を丁寧に描く。あるいは、砂浜に打ち上げられて無為に過ごす場面においては、荒波の誘いを断った自分の決断を肯定したり後悔したりする様子を描く。また、ペットボトルは、捨てられたことを忘れられずにいたわけであるから、回収作業に来たのが、自分を捨てたおじさんであることに気付いても不思議ではないはずである。したがって、なぜ、おじさんは回収作業をしているのが気になって仕方がないという描写を加える。そうすることで、「人間が大好きであった自分」「荒波からの誘いを断った自分」を肯定できて、人間への不信任や自分の存在意義の喪失感が消え、幸せな気持ちになるというクライマックスが、読み手の心に響いて、環境問題についてより考えさせる作品になったのではないかと思う。

入 選 「思いをつなぐ しあわせプリン」

みやぞの せいこ

○ 食は、そのおいしきで人を幸せな気持ちにしてくれる。食のもつ栄養で体を元気にしてくれる。でも、それだけではない。食には、それにまつわる思いが込められていて、それも含めて作り、味わうものであること、そして、その思いをつなぐのは、家族愛であったり平和を願う心であったりするということを感じさせてくれる物語である。最初は、プリンの詳細な描写に対して、なぜプリンなのかという印象ももったが、読み進めるうちに曾祖母や戦争の話とつながってきて、プリンの詳細な描写がぐっと意味をもってきた。そして、「つらいときや、ここ一番の頑張りときには、プリンを作っていたよ。」や「プリンは栄養満点なんだ。力がみなぎって心も体も元気にしてくれるんだから。」という曾祖母ちはるちゃん言葉には、戦争の悲劇や過酷な生活を乗り越えた者の含蓄が感じられた。

○ 現代っ子であるまみこのもつプリン観は、曾祖母であるちはるちゃんのプリンの話によって変わっていく。そして、うまく作れないという理由でプリン作りをやめていたまみこが、「体にも心にも栄養満点のプリン。優しい甘さで、喉ごしはなめらかなプリン」作りを目指すことを決心する。まみこは変わったが、プリンづくりの思いは変わることなく、曾祖母から曾孫へとつながる。物語におけるテーマと中心人物の果たす役割がしっかりとしている作品であると思う。

○ プリンをつくる時の手間が丁寧に描写されている。また、プリンの見た目や味、のど越しまで描写が細やかで、とてもおいしそうである。「耐熱ガラスの容器から大きなスプーンですくって取り分けます。プリンカップもいっけれど、こっちの方が断然おいしく感じます。」という叙述にも妙に納得してしまう。一方、曾祖母ちはるちゃんが声と肩をふるわせて語る戦時中の出来事は、悲劇的で、今でもその苦しみを背負っていることが伝わってくる。このコントラストも本作品の特徴であり、戦時中と現在とに隔世の感がある印象とともに、実はプリンがないでいるというあたりも巧みである。

「第42回 子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項

子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集いたします。

- 1 応募資格 高校生以上（16歳以上）の方でアマチュアに限る
- 2 作品の種類 創作童話、体験談、地方に伝わる民話に題材を得た作品などの「子どもたちに聞かせたい話」
- 3 応募規定
 - ☆ 第1部 保育園児、幼稚園児、小学校低学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き） 10枚～15枚
 - ☆ 第2部 小学校中、高学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き） 15枚～20枚
 - ☆ 表紙は枚数に含めません。各ページにページ数を記入してください。
 - ☆ 原稿はA4判の400字詰め原稿用紙を使用し、右肩をとじてください。（ワープロ原稿も可）
 - ☆ 作品は自作未発表でほかの童話賞等へ応募中の作品でないものに限ります。（公募で入賞した作品等の内容を加筆、訂正した場合も応募できません。）
 - ☆ 応募は、各部につき一人一作品に限ります。文体は自由です。
 - ☆ 表紙に、第1部・第2部の別、作品の題名、住所（郵便番号も記入）、氏名（ペンネームの場合は本名も書き添えること）、性別、年齢、職業（学校名）、電話番号、お持ちの方はメールアドレスを記入してください。
 - ☆ 人名、地名等の固有名詞には読み仮名をつけてください。
 - ☆ 民話、伝説等を題材とした場合は、その出典を明示してください。
 - ☆ 応募作品は返却いたしません。
 - ☆ 応募作品の著作権は応募者に帰属。主催者は入賞作品を冊子にまとめる権利を有します。
- 4 応募の締切 令和2年9月12日（土）消印有効
- 5 選考委員（50音順・敬称略）
 - 有村 真由美（鹿児島県学校図書館協議会会長 鹿児島市立草牟田小学校長）
 - 上野 恵美（鹿児島童話会理事）
 - 内村 英人（鹿児島市小学校国語部会会長 鹿児島市立喜入小学校長）
 - 田之上 由美（鹿児島市立図書館図書係主幹）
 - 花山 潤治（鹿児島県美育協会会長 鹿児島市立犬迫小学校長）
- 6 入選者発表 令和2年11月下旬頃
かごしま近代文学館かごしまメルヘン館ホームページ上にて発表します。
結果通知は、入選者のみとさせていただきます。
- 7 表彰式 令和3年2月21日（日）
- 8 賞
 - ☆ 特選（各部1編）…賞状及び楯、賞金5万円
 - ☆ 入選（各部3編）…賞状及び楯、賞金3万円
 - ☆ 佳作（各部数編）…賞状
- 9 主催 鹿児島市、鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団

応募状況

■ 応募総数

第1部	99点
第2部	106点
総数	205点

■ 年齢別応募状況

部門別	第1部	第2部	合計
16～19歳	0	2	2
20～29歳	4	8	12
30～39歳	13	10	23
40～49歳	21	13	34
50～59歳	22	23	45
60～69歳	22	26	48
70～79歳	12	14	26
80～89歳	2	8	10
90歳～	1	0	1
不明	2	2	4
合計	99	106	205

■ 都道府県別応募状況

都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数
東京都	30	京都府	6	福島県	2	福井県	1
鹿児島県	29	福岡県	6	茨城県	2	山梨県	1
大阪府	19	山口県	5	新潟県	2	静岡県	1
千葉県	11	長野県	4	滋賀県	2	和歌山県	1
神奈川県	11	広島県	4	徳島県	2	鳥取県	1
兵庫県	11	群馬県	3	宮崎県	2	高知県	1
愛知県	10	奈良県	3	岩手県	1	熊本県	1
埼玉県	8	香川県	3	宮城県	1	沖縄県	1
岐阜県	7	長崎県	3	秋田県	1		
北海道	6	青森県	2	富山県	1		

選考委員

(五十音順)

有村真由美氏(鹿児島県学校図書館協議会会長 鹿児島市立草牟田小学校校長)

上野 恵美氏(鹿児島童話会理事)

内村 英人氏(鹿児島市小学校国語部会会長 鹿児島市立喜入小学校校長)

田之上由美氏(鹿児島市立図書館図書係主幹)

花山 潤治氏(鹿児島県美育協会会長 鹿児島市立犬迫小学校校長)

表紙絵・xし絵

(五十音順)

榎本 容好氏(鹿児島市芸術文化協会会員)

花山 潤治氏(鹿児島市立犬迫小学校校長)

「子どもたちに聞かせたい創作童話」

第 42 集

発行 令和 3 年 2 月
編集者 鹿 児 島 市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団
鹿児島市城山町5番1号
TEL (099)226-7771
印刷所 (株)あすなろ印刷
鹿児島市城西2-2-36-205
TEL (099)214-3757

